

生徒のよさや可能性を引き出す

「深い学びの技法」

県中教研創設60周年記念講演会講師・田中 博之様(早稲田大学教職大学院)が提唱されている「深い学びの技法」を参照・引用

「深い学びの技法」を基に、生徒が主体的な課題解決過程に取り組む

「深い学びの技法」とは何か？またそのよさは何か？

「深い学びの技法」とは、生徒が高度な思考操作や認識の仕方などができるようになるための「学び方」になります。学習活動を通して、生徒が技法を使えるようになることで、深い学びに向かうようになります。

「深い学びの技法」を定着させるためのポイントは？

単元・題材で3～4つ程度を選び、組み合わせて、手立てとして活用しましょう。

目の前の生徒の実態に応じて、生徒のよさや可能性を引き出すような技法になるように、教科・領域に応じてアレンジしてみてください。

生徒たちが実際に学び方を通して、教科・領域の学習を深く学び、主体的に課題解決に取り組むようになります。深い学びの質的な向上を期待できます。

過程	深い学びの20の技法
設定	①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する ②知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする ③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする ④ R-PDCAサイクルを設定して活動や作品を改善する
思考	⑤資料やデータに基づいて考察したり検証したりする ⑥複数の資料や観察結果の比較から結論を導く ⑦視点の転換や逆思考をして考える ⑧異なる多様な考えを比較して考える
解決	⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする ⑩仲間と練り合いや練り上げをする ⑪原因や因果関係、関連性を探る ⑫学んだ知識・技能を活用して事例研究をする
表現	⑬理由や根拠を示して論理的に説明する ⑭学習モデルを活用して思考や表現をする ⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる ⑯要素的な知識や知見を構造化・モデル化する
評価	⑰既製の資料や作品を批判的に吟味検討する ⑱身につけた資質・能力をメタ認知し成長につなげる ⑲学習成果と自己との関わりを振り返る ⑳学んだことを生かして、次の新しい課題を作る

START 生徒が課題を設定し、主体的な課題解決に取り組む

HOW

「深い学びの技法」を手立てとして講じる

生徒の主体的な課題解決過程

設定

思考

解決

表現

評価

GOALS 生徒が互いに学びを深める

新潟県中学校教育研究会

ホームページをぜひご活用ください



深い学びにいたる授業



県中教研について



授業づくり



指定研究



刊行物

- デザインを一新し、見やすさ、使いやすさを重視しています。スマホ、タブレット画面にも対応しています。
- 「授業づくり」のコーナーを設置し、先生方の授業づくりに役立つ情報を発信します！
- 創設60周年記念大会のオンデマンド配信、過去のClassのバックナンバーを閲覧できます！



【URL&QRコード】
<https://niigata-chukyoken.jp/>

新潟県中学校教育研究会

【令和6年度】

- 会長 五十嵐守男(上越市立城西中学校 校長)
 副会長 金山 光宏(新潟市立白新中学校 校長)
 副会長 伊藤 法生(長岡市立東中学校 校長)
 理事長 佐藤 靖子(新潟市立内野中学校 校長)

新潟県中学校教員を会員とする教育研究団体です。昭和38年度に発足しました。令和5年度に創設60周年記念を迎えました。

県中教研は県下に19の郡市中教研があり、また、15の教科・領域の部があります。その中から毎年18～20の郡市と教科・領域を指定し、2年間で授業を研究し、提案する「指定研究」を行っています。

授業情報誌 第9号 Class・深い学びにいたる授業

発行日 令和6年10月1日

発行所 新潟県中学校教育研究会 事務局
〒950-0088 新潟市中央区万代1-3-30
万代シティホテルビル
(シルバーホテル)3階

TEL・FAX 025-290-2251
E-mail ken-ckk@niigata-inet.or.jp

印刷 有限会社東京プリント社
表紙・デザイン・イラスト 上村 慎吾(県中教研事務局長)

ISSN 2189-8111

今年度、県中教研では、田中博之様（早稲田大学教職大学院）が提唱されている「深い学びの技法」を基に、「深い学びにいたる授業」を具体的に提案します。生徒が「深い学びの技法」を基に、自身のよさや可能性を伸ばし、主体的に課題解決に取り組むことを目指します。生徒それぞれのよさや可能性に応じて、「深い学びの技法」を活用し、生徒が学びを深めていくことは、「個別最適な学び・協働的な学びの一体的な充実」を図り、「深い学び」の質的向上につながります。

私たち教師も「深い学びの技法」を基に授業を構想し、実践し、振り返り、ファシリテーションで学び合いながら、「深い学び合い」を目指します。

START 教師が深い学びの生徒の姿を設定し、研究推進委員同士で研究に取り組む

「深い学びの技法」を基に、教師が「深い学び合い」のサイクルを回す

目指す生徒の姿の設定



目指す授業の構想



研究推進委員 同士による実践

研究会での 成果発表



研究成果の 共有



教師の主体的な学び合い

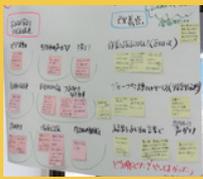
HOW

「ファシリテーション」を研究に取り入れる

各教科・領域で「深い学びにいたる生徒の姿」とそれに迫るための「深い学びの技法」を構想します。

そして、お互いに授業実践を共有し、研究会で成果を発表します。研究会の授業協議会で得た新たな学びを、自校で実践することで、会員が共に学び合い、共に高め合う「深い学び合い」のサイクルが活性化します。

教師の「深い学び合い」には、ファシリテーション（話し合いを促進する技法）が有効です。県中教研が伝統的に築き上げてきた下記の方法を活用し、学び合いを活性化させましょう。

	よさ	方法
KJ法 	参観者が授業で気付いた共通のものをまとめることで、参観者同士で新たな視点や考え方を共有できます。	①参観者が付箋に気付きをまとめます。 ②グループで付箋を出し合い、共通するものをまとめ、グルーピング、ラベリングします。 ③②について新たな視点や考え方を共有します。
マトリックス法（主にKPT法） 	協議題に応じて、観点別のフレームを設定し、参観者の気付きを共有します。さらに、授業の改善方法も共有できます。	①協議題に沿って、観点別のフレームを設定します。 （例）Keep（有効だった手立て）、Problem（改善すべき手立て）、Try（改善方法や代案） ②それぞれのフレームごとに、参観者の気付きを共有し、考えを深めます。
指導案拡大法 	授業展開に沿って、教師の働きかけが、生徒の思考や行動にどのように影響したかを分析できます。また、授業者の教授行動など細かい点も分析できます。	①本時の指導案を拡大機で複写します。 ②参観者は、授業で「教師の働きかけ」「生徒の反応」に関して、それぞれ気付いたことを付箋にまとめます。 ③指導案の流れに沿って、参観者の気付きを共有します。

GOALS 教師が互いに学びを深める

県中教研創設60周年記念大会報告

新たな時代を切り拓く県中教研
～深い学びのこれから～

トークセッション
講演会
式典

期 日：令和5年12月8日

会 場：万代シルバーホテル

開催方法：ハイブリッド開催

後 援

新潟県教育委員会

新潟市教育委員会

新潟県中学校長会

新潟県小学校長会

新潟県・新潟県小学校教育研究会

新潟県特別支援学校長会

一般財団法人新潟県教職員厚生財団

新潟県学校生活協同組合

新潟県学校教育用品株式会社

公益財団法人日本教育公務員弘済会新潟支部

教職員共済生活協同組合新潟県事業所



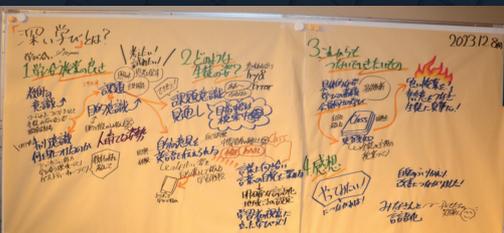
令和5年12月8日（金）に万代シルバーホテルを会場に、県中教研創設60周年記念式典及び講演会、トークセッションを実施いたしました。オンライン配信を活用したハイブリッド開催により、対面とオンラインを合わせて、約310名の皆様から参加いただきました。12月のご多用のところ、ご来賓の皆様、多くの会員の皆様からご参加いただき、誠にありがとうございました。

当日、オンラインでご視聴いただくことができなかった会員の皆様のために、オンデマンド配信を整備しています。また、記念講演会の講師である田中博之様（早稲田大学教職大学院 教授）の講演会資料や式典要項をダウンロードできます。

なお、Youtubeリンクならびに資料のダウンロードには、すべてパスワードが必要になります。パスワードにつきましては、右記のパスワードをご利用ください。

会員代表
トークセッション
記録

～県中教研の研究を通して、見えてきた「深い学び」の授業とは？～



オンデマンド配信内容（Youtubeによる会員への限定配信）

【配信映像】

前半

- ・開会式（オープニングムービー、創設60周年記念事業の概要報告）
- ・会員代表によるトークセッション

後半

- ・記念講演会
- ・「新潟県中学校教育研究会の歩み」ムービー

【オンデマンド配信アクセス方法】

アクセス方法の詳細は本冊子をご覧ください。

*新潟県中学校教育研究会の方であっても、許可なく映像や資料の無断転載、会員内の研修以外のための2次利用等は禁止いたします。

研修はワクワク、真摯に

新潟県中学校教育研究会は昨年度創設60周年、そして、今年度新たな61年目のスタートの年となりました。今年度の事業リーフレットには3つの重点が示されており、その1つに、60周年記念講演会の講師の田中博之様の提唱されている「深い学びの20技法」をもとに「深い学びにいたる授業」を提案していくことなどが掲げてあります。それらも含め、我々の研究の質的向上を図っていきましょう。

研修はワクワクして行いたい

私は教員の職務には2種類あると思っています。1つは、アレルギー対応など生徒の生命にかかわることや、個人情報の管理、受検の事務など、100%確実に遂行することが要求されるもの。もう一つは、学習指導や学級経営など、必ず100%確実な遂行をしなければいけないというものでもないものです。前者はピリピリして取り組むものですが、我々中教研の研修は後者の方で、だからこそワクワクして臨みたいものだと思っています。

私が若いころ、理科の授業で生徒たちに元素記号を覚えさせたいと、100%を目指し毎時間の初めに小テストを繰り返し、時には、昼休みなどに再テストを行うなど徹底的に取り組みました。しかし、約1か月後の定期テストでは、生徒たちの習得は100%に至りませんでした。ある年、小テストをやめて元素記号のカルタ取りを毎時間授業の初めに行いました。生徒たちは楽しそうにカルタ取りを行ってくれ、私自身もワクワクしながら行うことができた記憶があります。結果、習得状況は小テストを繰り返した時とさほど変わらなかったと覚えています。

アレルギー対応や個人情報の取り扱いのように100%完璧におこなうべきものとは違うのが、学習指導であり(勿論、100%習得させたいこともあります)、また、正解のない問いを追求していくことが、これからを生きる子供たちにとって大切になってく時代だからこそ、まさに「ワクワクして」は、キーワードであると思っています。我々教員も生徒も、毎時間そんな姿勢での授業や研修に臨むことができればと思っています。

新潟県中学校教育研究会

副会長 伊藤 法生

(長岡市立東中学校 校長)



昨年度、中教研の会議で五十嵐会長があいさつの中で、このClassに写っている先生方の顔写真がみなさんにこやかでワクワクした表情で写っておられることに触れられていました。担当した研究には苦勞も多いと思いますが、中心となって取り組んでいる先生方の前向きな姿勢がその写真の表情に表れていると言っておられました。今後も、中教研の活動がワクワク感をもって進んでいくことを期待せずにはられません。

中教研の意義

10年以上も前の話ですが、ある県外の研修会に参加した際、私立中学校の教員と話す機会がありました。その私立学校では教員一人一人にいくらかの研修費が配当されていて、教員がそのお金を使って、個々にいろいろな研修会を探してそれに参加したり、先進的な学校に訪問したりして勉強していると言っていました。確かに、公立学校の教員のように、県センや市センの研修や中教研や市教研などの研修機関での研修の機会がない私立学校の教員は、そのようにしてしか研修ができない環境に置かれていると感じました。

生徒に、「世界には、学校に来たくても来れない生徒がたくさんいるんだ、今ある状況に感謝して勉強しなさい」というようなことを、私自身も含め、言ったことのある先生方も多いのではないのでしょうか。私立学校の先生に比べて我々は恵まれているということであると思います。豊富にある研修の機会を積極的にとらえ、研修に真摯に取り組むという姿勢を大切にしたいものと思っています。

この中教研の活動が、先生方の日々の研修の良いきっかけになったり、また、できれば中心的役割に少しでもなればと思っています。研修は、自分の力量を高めるためですが、結局は、すべては子供のため。今後も、先生方がワクワクしながら、そして真摯に研修に取り組んでいくことを期待しています。

目次

巻頭言 第9号発刊にあたって
研修はワクワク、真摯に 2
新潟県中学校教育研究会 副会長 伊藤 法生

特別寄稿
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた
「個別最適な学びと協働的な学び」の充実 6
文部科学省初等中等教育局 主任視学官 田村 学

《指定研究推進都市および2年次研究会 会場校》 14

1 指定研究（2年次）の研究推進委員会が提案する 「深い学びにいたる授業」

国語

課題を工夫し、伝え合う場を充実させて
自身の考えを練り上げ再構築する授業づくり 16
県中教研 国語部 全県部長 渡辺 徳彦

「3年：夏草－「おくのほそ道」から－」 18
上越地区／上越市中教研

「3年：複数の情報を関連づけて考えをまとめる」
～「魚沼紹介ポスター」を作ろう～ 20
中越地区／魚沼市中教研

「2年：漢詩の風景」「3年：君待つと一万葉・古今・新古今」 22
新潟地区／新潟市中教研

「3年：故郷」 24
下越地区／新発田市中教研

数学

数学的活動の充実を目指して～「数学化」の過程に焦点を当てて～ 26
県中教研 数学部 全県部長 山本 俊介

「2年：データの分布」 28
上越地区／上越市中教研

「3年：図形の相似」 30
中越地区／長岡市・三島郡中教研

「1年：変化と対応」「2年：図形の調べ方」「3年：関数 $y=ax^2$ 」 32
新潟地区／新潟市中教研

「3年：相似な図形」～相似な図形の面積比～ 34
下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研

道徳

対話や語り合いをとおして、多面的・多角的に考え、
深い学びにいたる授業づくり 36
県中教研 道徳部 全県部長 和泉 哲章

「1年：もったいない」「2年：夜の果物屋」	
「3年：家族の思いと意思表示カード」	38
上越地区／妙高市中教研	
「3年：サルも人も愛した写真家」	40
中越地区／見附市中教研	
「2年：むこう岸には」「3年：希望の義足」	42
新潟地区／新潟市中教研	
「3年：人間の命とは」～人間の命の尊さ・大切さを考える～	44
下越地区／村上市・岩船郡中教研	

美術

「想像」と「創造」の往還を通して、見方や考え方、感じ方を深める授業	46
県中教研 美術部 全県部長 稲生 一徳	
「2年：水墨画」	48
上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研	
「3年：つばやきのピクトグラム」	
～身の回りのあるあるをわかりやすく伝える～	50
新潟地区／新潟市中教研	

技術・家庭

生活を工夫し、創造しようとする生徒の育成	
～実体験や関わりを通して深く追究する授業～	52
県中教研 技術・家庭部 全県部長 青木 新一	
「3年：情報の技術」	
計測・制御のプログラミングの力で、より安全・安心な	
ハーブ栽培サポートシステムの開発を目指そう！	54
中越地区／長岡市・三島郡中教研	
「1年：材料と加工の技術」	
生活に役立つ製作品を作ろう～伝統文化から学ぼう～	56
下越地区／佐渡市中教研	

特別活動

自己や集団の課題を見だし、多様な他者と共に解決できる生徒の育成	58
県中教研 特別活動部 全県部長 田村 和弘	
「2年：理想の3年生になるために」	60
中越地区／小千谷市中教研	
「3年：なかよし子どもサミット」	62
下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研	

総合的な学習の時間

実生活や地域の中から自ら課題を見出し、その解決のための方策を探る	64
県中教研 総合的な学習の時間部 全県部長 小塚 忠昭	
「3年：三和区地域活性化プロジェクト」	
～もうすぐで上沼道三和IC開通！わくわく三和区！～	66
上越地区／上越市中教研	
「3年：しもまちプロポジション」	
～しもまちの活性化を地域住民とともに創出しよう～	68
新潟地区／新潟市中教研	

② 指定研究（1年次）の研究推進委員会の進捗状況

社会	71
理科	72
英語	73
音楽	74
保健体育	74
学校保健	75

編集後記	新潟県中学校教育研究会 理事長 佐藤 靖子	76
------	-----------------------	----

〈特別寄稿〉

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「個別最適な学び」と協働的な学び」の充実



文部科学省初等中等教育局
主任視学官 田村 学

1. 学習指導要領の改訂と授業改善

平成29年に学習指導要領が改訂され、生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」、学びを人生や社会において生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」を一人一人の子供に育成していくことが求められることとなった。そのためにも、学びの過程において、実社会や実生活と関わりのあるリアリティのある真正の学びに主体的に取り組んだり、異なる多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学びを実現することが大切となった。単に知識を記憶するだけにとどまらず、身に付けた資質・能力が様々な課題の対応に生かせる事を実感できるような、学びの深まりが欠かせない。

こうした「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、学習過程を質的に高めることが必要であり、そのための授業改善が以下のように示されてきた。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

2. 「主体的・対話的で深い学び」のイメージ

(1) 「主体的な学び」

「主体的な学び」とは、学習者としての子供が自らの学びをコントロールできることと捉える。自分ごとの課題を、自分の力で解決し、その過程と成果を自覚する。これを繰り返すことで、子供は自分自身の力で学びをコントロールすることができるようになる。したがって、「主体

的な学び」については、授業の導入における「課題設定」と「見通し」、終末における「振り返り」に意識を向けたい。

(2) 「対話的な学び」

「対話的な学び」については、異なる多様な他者との学び合いを重視することが大切になる。学習のプロセスを質的に高めていくとともに、他者と力を合わせた問題の解決や協働による新たなアイデアの創造が求められているからである。問題の解決場面においては、自分一人で行うのではなく、多くの人の参加による協働で解決に向かって取り組んでいけることが大切になる。

(3) 「深い学び」

「深い学び」については、これまで以上に学びのプロセスを意識することが求められる。問題を解決するプロセス、解釈し考えを形成するプロセス、構想し創造するプロセスなど、教科固有のプロセスが一層充実するようにしたい。なぜなら、学習のプロセスにおいては、それまでに学んだことや各教科等で身に付けた知識や技能を活用・発揮する場面が頻繁に生み出されるからである。

「深い学び」の実現のためには、身に付けた知識や技能を活用したり、発揮したりして関連付けることが大切になる。だからこそ、明確な課題意識をもった主体的で文脈的な学びで知識や技能のつながりを生むことが必要であり、情報としての知識や技能を対話によってつないで再構成する処理場面の活性化なども重要となる。また、学習活動を振り返り、体験したことと収集した情報や既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理し意味付けたり、それを自覚したり共有したりすることも大切になる。

このように考えてくると、「主体的な学び」「対話的な学び」が「深い学び」に大きく関与していることが理解できる。「主体的な学び」「対話的な学び」は、それ自体に意味があり価値がある。しかし、それらが、「深い学び」の実現に向かう確かな学びになっているかどうか極めて重要になってくる。

3. 「深い学び」と活用・発揮

先に示した三つの学びの姿は、一体となって現れる姿である。また、どれもが欠かすことのできない重要なものであり、それぞれが実現を目指すべき学びの姿と考えることが大切である。しかしながら、「深い学び」については、「主体的な学び」「対話的な学び」に比べて分かりにくさがあるとの指摘もある。「深い学び」についての検討をさらに進めていくこととする。

2. (3)に記したとおり、「深い学び」は学習過程としてのプロセスが大切なポイントになる。例えば、生活科において資質・能力を育成する学習過程は、好奇心や探究心、対象への興味や親しみ、憧れなどからくる「やってみたい」「してみたい」「できるようになりたい」といった自分の思いや願いをもち、そのために具体的な活動や体験を行い、直接対象と関わる中で感じたり考えたりしたことを表現したり、行為したりしていく過程と考えることができる。総合的な学習の時間では、「①課題の設定」→「②情報の収集」→「③整理・分析」→「④まとめ・表

現」の探究の過程としてイメージすることができる。これらの学習過程は、各教科等によっていくらか違いがあり、例えば、問題発見・解決の過程、解釈・形成の過程、構想・創造の過程などと整理することもできる。

「深い学び」とは、子供たちが習得・活用・探究を視野に入れた各教科等固有の学習過程の中で、それまでに身に付けていた資質・能力を存分に活用・発揮し、その結果、資質・能力が様々な関連付いたり、組み合わせられたりして構造化されていくことと考えることができる。その結果、より深く理解することに至り、異なる状況でも活用できるものとなり、安定的で持続的なものとして資質・能力は確かになっていく。

例えば、理科や社会の授業では、事実的な知識を関連付けて概念的な知識を獲得する姿をイメージすることができる。図画工作や体育の授業では、技能を一連の連続したものとしてつなぎ合わせて確かなものにするのと重なる。そこでは、知識・技能が関連付いて概念化され、連動して一体化し、その結果、安定的で再現可能なものになる。こうして知識・技能は、活用・発揮することで他の知識・技能などにつながり生きて働く状態となる。思考力、判断力、表現力等も、活用・発揮することで、実際の活用場面などにつながり、いつでもどこでも自在に使える、汎用性の高い、未知の場面でも対応できる資質・能力として育成される。さらには、学びに向かう力、人間性等は、学びの意義を実感し、心地よい手応え感覚とつながり人世や社会に生かせる安定的で持続的な資質・能力となる。授業づくりにおいては、資質・能力の育成を具体的にイメージするとともに、「深い学び」の実現に結び付けることを心がけることが大切である。

したがって、「深い学び」を考える際のキーワードは、「つなぐ (connect)」と考えることができる。すなわち、知識をつなぎ、関連付け、精緻化することが「深い学び」を実現していく。そして、そのことこそが、資質・能力の三つの柱を確実に実現していくのであろう。その意味では、「深い学び」とは、「知識（宣言的な知識）・技能（手続き的な知識）が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと」と考えることができる。指導する教師一人一人の知識観を拡張し、資質・能力を精度高くイメージしていくことがポイントとなる。

4. 令和の日本型学校教育の答申

新しい学習指導要領が示され、資質・能力の育成に向けた授業改善が行われる中、令和3年1月26日、中央教育審議会は、「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」を出した。学習指導要領が改訂されたのは平成29年である。小学校における全面実施が令和2年、中学校では令和3年になる。新しい学習指導要領が実施されていく最中の答申について、多くの方が「なぜ今？」と疑問に思われたのではないだろうか。各学校では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての授業改善が行われている中、「個別最適な学びと協働的な学び」といった新しい言葉が示されたことに驚きと違和感を抱いていた方もいるのではないだろうか。

このことについて、私たちはどのように理解すべきだろうか。一つは、それだけ激しい変化が起きていることと考えることができよう。新型コロナウイルス感染症の感染が拡大する中、オンラインを使った学びが求められ、加速度的に広がってきたように、学校教育を取り巻く状況が劇的に変化し始めていることを認識しなければならない。Society5.0時代と言われていた社会は一気に目の前に現れてきている。過去における学校教育の良さを踏まえながらも、大きな変化は待たないで進めていかなければならない状況にあると理解することができる。その象徴的な施策にGIGAスクール構想がある。

もう一つは、本来期待していた豊かな学びは変わるものではなく、異なる文脈からの説明であると考えられよう。つまり、「主体的・対話的で深い学び」は、能動的な学習、いわゆるアクティブ・ラーニングの文脈から示された期待する学びの姿である。一方、「個別最適な学びと協働的な学び」は、一人一人の個に応じた学び、いわゆるアダプティブ・ラーニングの文脈から示された期待する学びの姿である。期待する豊かな学びを角度を変えて示していることであり、決して違うものを目指すようなことではない。これまでと同じ資質・能力の育成に向けて、授業改善を進めていくことと理解することができる。

このように考えるならば、教育を取り巻く状況が大きく変わる中、令和の日本型学校教育の構築として「個別最適な学びと協働的な学び」が示されたことの意味を理解することができる。子供が自ら学びに向かうことを大切にするとともに、一人一人の子供に応じた学びの充実に、今まで以上に意を配らなければならない。また、そうした学びの実現のための指導の在り方や学習環境などを見つめ直さなければならない。

5. 答申で目指す「個別最適な学び」

答申で着目すべきは、「3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿」にある。そこでは、「個に応じた指導」を教師視点から整理した概念とし、学習者視点から整理した概念を「個別最適な学び」としている。その上で、「個別最適な学び」を「指導の個別化」と「学習の個性化」とに整理し、以下のように示している。

「全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である」

「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である」

「個別最適な学び」は、一人一人の子供が知識を習得したり、活用したりして確かな資質・能力を身に付けていくことを期待している。また、それぞれの子供に応じた課題を、本気で真剣に解決に向かって取り組む探究などによって、実際の社会で活用できる資質・能力が育成されていくことを期待している。今回の学習指導要領改訂の基本理念とも言える「学習する子供の視点に立つ」とする考えを、確実に一人一人に実現していこうとする方向性が鮮明である。

こうして学習指導要領の改訂で大切にしてきた「主体的・対話的で深い学び」に、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を補完することにより、学びを能動的でアクティブなものにするだけでなく、一人一人に目を向けたアダプティブなものに進化させようとしていると考えることができる。

一方、「個別」という言葉とGIGAスクール構想による一人一台端末の実現によって、子供一人一人が情報端末を抱えて学習活動を展開するイメージが広がっている。そこでは、集団による一斉の学習活動を否定する発言も聞かれる。また、「個別」に執着するあまり、一人一人の子供にとって確かな学びが実現されているかが心配になる実践も見受けられる。「個別最適な学び」において大切なことは、子供にとって「最適」な学びが実現されることであり、その結果、「個別」に行われる学習活動となる可能性が生まれることであろう。「個別」を優先し、見た目の学習活動を形式化することが目的ではない。一人一人の子供に確かな学びを実現することが大切であり、その結果、「個別」になることもあれば、「集団」になることもある。

おそらく、「個別」の学習活動の場面では、それぞれの子供に相応しい自律的な学習活動を、安定的かつ質高く実現することが欠かせない。そのためにも、「個別」の場面（ここでは、学習過程における「middle：展開」とする）における状況を整えること、「個別」に行われる学習活動の前後の一斉指導の場面（ここでは、学習過程における「before：導入」と「after：終末」とする）において以下のように配慮することが大切になる。

(1)「目的や課題、見通し」で自ら学びに向かう

これまで示してきたように資質・能力の育成のためには、思いや願いを実現し、目の前の問題を解決していくプロセスの充実が欠かせない。実際の社会で活用できる資質・能力の育成は、まさにプロセスの中で知識や情報が繰り返し活用・発揮され、どのような場面や状況においても自在に使いこなせる状態になることと考えてきた。

そのためにも、一人一人の子供にとって、何を解決するかという目的や課題が重要になる。その上で、見通しをもつことも欠かせない。見通しには到達点の見通しと通過点の見通しがある。この両者が明確になることで、学習する子供は、自らの意志で自律的に学びに向かっていく。

したがって、学習活動の導入場面や「個別」の学習活動に入る前（before：導入）には、目的や課題を明確にすること、到達点と通過点からなる見通しをはっきりさせることが欠かせない。そのことによって、何を学習するのか、どのように学習するのか、どこに向かって学習するのかが明らかになり、一人一人の学習活動は、他者に依存したものではない自律的な学習となる。

(2) 「内化と外化」で知識が活用・発揮される

期待する方向に向かい始めた学びを一層充実したものにするためには、プロセスにインタラクション（相互作用）を位置付けることが考えられる。学びのプロセスにおいて、より多くの知識や情報、より異なる知識や情報が加わり、プロセスは質の高いものとなっていく。たくさんの事実に関する知識は構造化され概念となって形成されていく。手続きに関する知識は様々な場面や状況と結び付いて自在に使える能力となっていく。

こうしたつながりは活用と発揮によってもたらされる。プロセスの充実とそこでのインタラクションは、知識の活用と発揮を生み出し、結果としてつながり構造化された知識を生成することとなる。ここで考えるインタラクションには、他者との対話だけではなく、自己内対話も含まれる。内なる自分と向かい合い、内言によってじっくりと語り合う熟考の姿は極めて大切である。さらには、教材との対話も視野に入れたい。それぞれの子供に相応しい教材、適切に資質・能力が育成される教材と出会い、そこでどのような学びが展開されるかをイメージすることは極めて重要である。

したがって、充実した豊かなインタラクションを実現するためには、必要かつ適正な知識や情報が一人一人に応じて獲得できるようにするとともに、その知識や情報の活用機会が増えることが大切である。そのためにも、いかに学びの状況を整えるかに配慮したい。思考ツールなどによって異なる多様な他者との対話が生まれやすい状況を整えること、一人一人の子供の習熟度、興味・関心、認知特性、学習方略などの実態に応じて、適切な情報にスムーズにアクセスできるようにすることなどが欠かせない。学習活動の展開場面における話し合いや「個別」の学習活動（middle:展開）においては、多様な他者や適切なリソースとの相互作用が生まれる状況を設定したい。

(3) 「振り返り」で知識を構造化する

プロセスとインタラクションに加えて、もう一つ重要な要素がリフレクション（省察）になろう。自らの学びを振り返り意味付け、価値付ける。そのことが、知識の構造化を確実にする。構造化された知識は、活用だけではなく定着にも向かう。単元や授業の後半（after:終末）に振り返りをしっかり行うことには大きな価値がある。

ここでは文字言語を使うことが多くなるだろう。音声言語は緩やかに広がるという特性があり、異なる多様な情報を瞬時に交流したい場面では最適である。一方、文字言語は明示され自覚しやすい。加えて、記録として残すこともできることから共有することにも向いている。この音声言語と文字言語を巧みに使い分けることが学び全体の質を高めていく。

6. 答申で目指す「協働的な学び」

この一人一人に応じた「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでも多くの学校が取り組み、優れた実践を生み出してきた「協働的な学び」の重要性が答申においても明確に示されている。

「令和の日本型学校教育」においては、これまで以上に一人一人の子供に応じた「個別最適な

学び」を重視することが期待される。そのことは、一方で、これまで以上に「協働的な学び」が欠かせないものであることをも示している。つまり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は相互に補完し合う関係にあり、両者は支え合い、往還し合うことによって、子供一人一人の学びは豊かさを増すと考えることが大切なのであろう。

実際の授業で、学習者である子供に聞いてみると、このこと確かさが明らかになる。ある子供は、次のように語っている。

「クラスみんなで話し合ったり、意見をもらったりすると、自分の考えを広げていくことができる。たくさんの発言を友達に伝えていくことができ自信にもなる。発言することで、自分で考えることにもなるし、話し合いをする中で、自分の考えがはっきりしてくる」

このように個の学びは、集団の学びによって一層磨きをかけられ、確かさを増すことになるのであろう。両者は行きつ戻りつしながら、それぞれに高まっていく。

では、「協働的な学び」には、どのような価値があるのだろうか。子供の姿から考えてみたい。総合的な学習の時間で、平和について探究している以下の子供の会話の様子を参考に検討してみよう。

子供が自ら創作した平和劇の台詞「あなたは一人じゃない、あなたの後には、未来を託した人がある」について、教師は次のように発問した。

教師：「この台詞が最も大切だと考えるのはなぜですか？」

最初に発言したAは次のように語った。

A：「お母さんに守られていて無傷だった。お母さんが子どもに未来を託したんだと思う」

Aの発言に続いてB、C、Dと子供の発言が続いた。

B：「戦争が二度と起きてはほしくないって感じがするな。」

C：「くじけても助けてくれる明日への言葉って感じがするよ」。

D：「私は、亡くなった人の思いがあると思う。自分の分まで生きてほしいと願っていると思う。」

三人の発言を聞いたAは再び手を挙げて語った。

A：「原爆直後に亡くなった人もいる。放射能で亡くなった人もいる。戦争が二度と起きないように、そうした多くの人の思いが、明日の未来に向けて僕たちに託されているんじゃないかな。」

子供の姿から、異なる情報や大量の情報を入手すること、表現することで知識を再構成し構造化すること、関連付けて新たな知を創出することなどの「協働的な学び」の良さを見出すことができる。意見交換や話し合いによって、子供の学びは期待する方向に高まり、資質・能力が育成されていく。

このことを「主体的・対話的で深い学び」と照らし合わせて考えてみよう。「主体的・対話的で深い学び」では、学習する子供が、知識や情報をインプット（内化）し、それをアウトプット（外化）する認知プロセスを活性化することが大切になる。そのことは、これまでのインプット中心だった教室でのパッシブ・ラーニング（受動的学習）を、知識を活用・発揮しアウトプットするアク

ティブ・ラーニング（能動的学習）へと意識転換することと考えると納得がいく。

大切なことは、そうした認知プロセスが活性化する学びにおいて、自らの意志の下、自覚的、目的的に学びを進めることが大切であり、そのことこそが「主体的な学び」を意味する。学びが自律的になることを期待しているのである。そこでは、友達や周囲の人たち、文献などから知識や情報を手に入れることが可能となり、それを他者に伝え表現する「対話的な学び」が行われる。そして、そこには新たな知が創造されることが期待されている。こうした学びにおいては、頭の中がフル回転して、バラバラだった知識がつながり、ネットワーク化し構造化していく「深い学び」が実現する。この関係を知識の粒が組み立てられ塊になると考えると分かりやすい。粘土の粒を組み立てると造形作品が完成する。レゴブロックを組み立てると街ができるイメージである

加えて、「協働的な学び」の態度的な側面からの価値については、異なり多様であること、関わり合い力を合わせることで、開かれ共有することなどを実感することとも考えられる。異なる多様な他者との協働は、先に示した価値を実感することにつながる。そのことが、一人一人の子供の具体的な行為へと結び付き、態度化へと高まるのであろう。「協働的な学び」は認知的な側面だけではなく、態度的な側面においても意味があり、価値のある学びと考えることができる。この「協働的な学び」は、ICTやオンラインの環境を整えることでさらに大きく飛躍していく。デジタル学習基盤によって、時間と空間を超越した学びが展開され、想像もできなかった「協働的な学び」を実現する状況が整いつつあることも付け加えておきたい。

教師の指導によって、子供の学びを「個別最適な学び」へと方向付けていくとともに、「協働的な学び」の大切さを示してきた。そして、そのことが「主体的・対話的で深い学び」を実現していく。このことは、学校という社会資本の価値を再認識することでもある。学校には、力を合わせたり、交流したりして、課題を解決し目標の実現に向かっていく仲間がいる。そこには、教師の高度で幅広い指導があり、その結果、子供の学びは質高く実現する。さらには、意図的で計画的なカリキュラムによって、期待する学びは安定的かつ持続的に実現する。学校という学びの場の重要性を再確認することが求められている。

【引用・参考文献】

- ・文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会 平成28年12月21日）
- ・田村学著「深い学び」（東洋館出版社 平成30年4月13日）
- ・中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日）

指定研究推進郡市および2年次研究会 会場校

◇ 令和5・6年度指定 (上段より：指定研究推進郡市、研究会会場校、研究会開催日)

	上越	中越	新潟	下越
国語	上越 (上越市立春日中学校) 11月12日(火)	魚沼 (魚沼市立小出中学校) 11月1日(金)	新潟 (新潟市立東新潟中学校) 11月7日(木)	新発田 (新発田市立加治川中学校) 11月27日(水)
数学	上越 (上越市立城北中学校) 11月12日(火)	長岡・三島 (長岡市立刈谷田中学校) 11月13日(水)	新潟 (新潟市立内野中学校) 11月7日(木)	五泉・東蒲 (五泉市立五泉北中学校) 11月26日(火)
道徳	妙高 (妙高市立新井中学校) 11月22日(金)	見附 (見附市立見附中学校) 11月20日(水)	新潟 (新潟市立黒埼中学校) 11月14日(木)	村上・岩船 (村上市立朝日中学校) 11月15日(金)
美術	柏崎・刈羽 (柏崎市立東中学校) 11月12日(火)	—	新潟 (新潟市立新津第一中学校) 11月7日(木)	—
技術・家庭	—	長岡・三島 (長岡市立宮内中学校) 11月27日(水)	—	佐渡 (佐渡市立新穂中学校) 10月25日(金)
特別活動	—	小千谷 (小千谷市立南中学校) 11月21日(木)	—	阿賀野・胎内・北蒲 (阿賀野市立水原中学校) 10月30日(水)
総合	上越 (上越市立三和中学校) 11月28日(木)	—	新潟 (新潟市立新潟柳都中学校) 10月4日(金)	—

◇ 令和6・7年度指定 (上段：指定研究推進郡市、下段：令和7年度研究会 会場校)

	上越	中越	新潟	下越
社会	柏崎・刈羽 (柏崎市立松浜中学校)	長岡・三島 (長岡市立栖吉中学校)	新潟 (新潟市立新津第五中学校)	五泉・東蒲 (阿賀町立三川中学校)
理科	上越 (上越市立城東中学校)	南魚沼・南魚 (南魚沼市立六日町中学校)	新潟 (新潟市立下山中学校)	村上・岩船 (村上市立山北中学校)
英語	糸魚川 (糸魚川市立能生中学校)	加茂・南蒲 (田上町立田上中学校)	新潟 (新潟市立亀田西中学校)	佐渡 (佐渡市立相川中学校)
音楽	柏崎・刈羽 (柏崎市立北条中学校)	—	新潟 (新潟市立新津第一中学校)	—
保健体育	—	長岡・三島 (長岡市立秋葉中学校)	—	阿賀野・胎内・北蒲 (聖籠町立聖籠中学校)
学校保健	上越 (上越市立吉川中学校)	—	新潟 (新潟市立東石山中学校)	—

1

指定研究（2年次）の 研究推進委員会が提案する 「深い学びにいたる授業」

今年度、研究会を実施する教科・領域の
全県部長による解説と、各地区の研究推
進委員会が提案する「深い学びにいたる
授業」を紹介します。



国語

数学

道徳

美術

技術・家庭

特別活動

総合的な学習の時間



読み方のポイント

全県部長による解説

各研究推進委員会の取り組みを踏まえて、「深い学びにいたる授業」に必要な視点を解説しています。

各研究推進委員会の実践

□ 「目指す深い学びの姿」

→各研究推進委員会が考える深い学びの姿について紹介しています。

□ 「主な手立て」

→「深い学びの20の技法」と「生徒の主体的な課題解決過程」との関連を踏まえて、目指す深い学びの姿に迫るために、教師がどのような手立てを講じるかを紹介しています。

□ 「単元（題材）の様子」

→単元（題材）の授業や活動などを通して、生徒がどのように深い学びにいたるかを紹介しています。

国語

課題を工夫し、伝え合う場を充実させて 自身の考えを練り上げ再構築する授業づくり

国語科の授業で生徒が深い学びにいたるためには、「作品を通した伝え合う場をどう充実させるか」が重要です。

なぜ伝え合う場の充実が大切かというと、作品について自分の考えを伝え合う中で、練り合い、練り上げが起こり、自分の考えが再構築されるからです。

課題に興味をもたせることや、自分の考えに自信をもつための基礎知識の理解も充実した伝え合いの土台となります。



県中教研 国語部 全県部長
上越市立八千浦中学校

校長 渡辺 徳彦

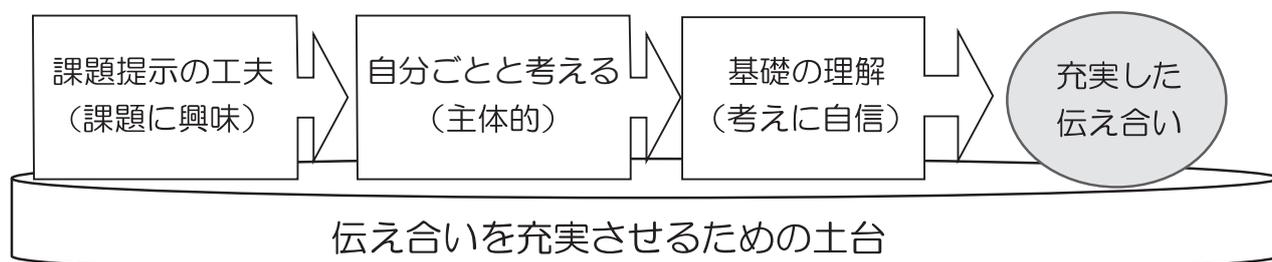
「伝え合う場」充実への土台づくり～課題への興味や基礎知識～

例えば、約350年前の江戸時代に書かれた松尾芭蕉の紀行文「おくのほそ道」を、令和の生徒に興味深く読ませるにはどうすればよいのでしょうか。興味をもつということは「自分ごとと捉える」ということ。古典に記された内容と、現代の自分との共通点を見い出すことも、古典作品を自分ごとと考えるための一つの大きな手法です。

共通点を見いだすために、まず、作品を正しく理解することが求められます。歴史的背景、当時の旅の意味、俳句の形式などの基礎知識を学んでおく必要があります。その上で、芭蕉は何に心を動かされたのか、自分の考えをまとめます。芭蕉は、奥州平泉を訪れ、「平家物語」の中で活躍が描かれる源義経の最期に思いをはせました。

ここで大切なのは芭蕉が思いをはせた内容や旅に対する思いを正しく捉えなければ「伝え合い」が正しく成立しない点です。古典作品「おくのほそ道」の筆者がさらにその400年前の「平家物語」に思いをはせる。それを令和の自分たちが思いをはせて読む。この古典作品や歴史のつながりの線上に自分たちも存在するという意識させた課題提示を工夫すれば、古典作品を自分ごとと捉えるのではないのでしょうか。

作品を正しく理解することで自信をもって自分の考えを伝え合うことができます。歴史的背景、当時の旅の意味、俳句の形式などの基礎知識が土台として大切であることが分かります。



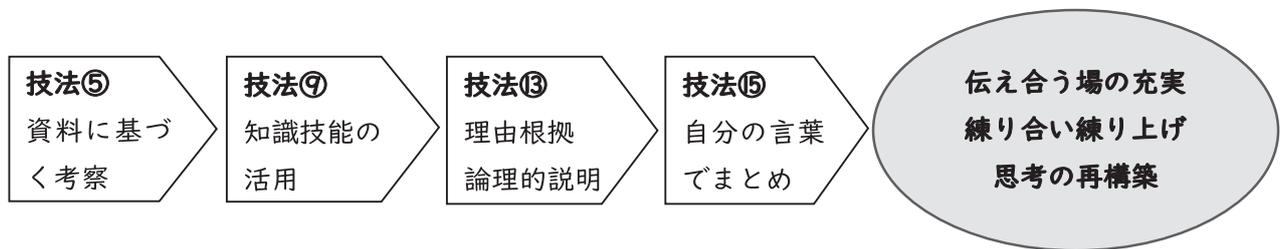
深い学びにいたるための「作品を通した伝え合う場の充実」をどう工夫するか（練り合い練り上げを実現する深い学びの技法）

「主体的・対話的で深い学び」にいたるために、伝え合う場をどう充実させるかが重要です。自分の考えを伝え合う中で練り合い、練り上げが起こり、自分の考えが再構築されます。これが早稲田大学田中教授の「深い学びの技法⑩」です。友だちとの練り合いや練り上げは「深い学び」の真骨頂です。

練り合いや練り上げが起こる場をつくるため、まずは個人が資料やデータに基づいて考察します。（深い学びの技法⑤）作品を通した

伝え合いの場では、作品を学んだ基本的な知識技能を活用して思考や表現をします。（深い学びの技法⑨）また、理由や根拠を示して論理的に説明することも大切です。（深い学びの技法⑬）そして、自分の言葉で学んだことを整理してまとめます。（深い学びの技法⑮）

このように、深い学びの技法を生徒に意識させながら伝え合う活動を行うことで、自分の考えの練り合い練り上げが起こり、考えが再構築されます。



課題に興味をもたせ、伝え合う場を充実させる各地区の工夫

国語の授業で深い学びにいたるために「伝え合う場をどう充実させるか」を共通理解し、各地区独自の迫り方で伝え合う場を充実させています。以下に取組の例を紹介します。

- 古典の内容を「自分ごと」と考えることができる課題提示を行う。
- 正しく作品を理解し、伝え合いを正しく方向付けるために、作品についての基礎・基本を定着させる。
- 習熟度に関わらず自己の考えを練り上げるためICT機器を活用。
- 主張について根拠や理由付けを大切にして作者の意図に迫ることで読みを深める。
- 「学習ログ」を活用して主体的な学びを支えるだけでなく、思考を再構築する振り返りの場面で「学習ログ」を更新する。

国語 重点方針

言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育てるために、話す・聞く、書く、読む力を育み、学ぶ意欲をもつことができる国語の学習指導に努める。

- 学び合う言語活動を通して、考えを広げたり深めたりし、思考力や想像力を育てる。
- 考えを明確にし、構成を考えて文章を書く力を育てる。
- 話の内容や意図に応じた表現力を育てる。
- 目的に応じて主体的に文章を読み、内容を的確に読み取る力を育てる。

国語 <上越地区／上越市中教研>

11月12日(火) 研究会開催

研究主題：課題を「自分ごと」として捉え、思考の過程を楽しみながら考えを深める生徒の育成

単元名：「3年：夏草－「おくのほそ道」から－」

会場校：上越市立春日中学校

公開：2学級

授業者：笠尾 民子・後藤 弘彦

指導者：上越教育大学教職大学院 教授 佐藤 多佳子 様
上越教育事務所 指導主事 草間 啓 様



研究推進責任者
上越市立直江津東中学校
丸山 徳子



教科・領域担当者
上越市立春日中学校
笠尾 民子

こんな深い学びの姿を目指します

古典作品を今の自分と関連付けてとらえ、自他の考えを交流させながら、作品に流れる筆者の見方や考え方を追究していきます。生徒が深めたい課題を設定し、考えの根拠・理由を明確にするプリントによって考えの可視化を図り、多面的・多角的な考察や話し合いを促します。小グループや全体での交流を通して考えの変容・深化・強化を自覚し、根拠を明らかにして自分なりの作品観をまとめる姿を目指します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.3）

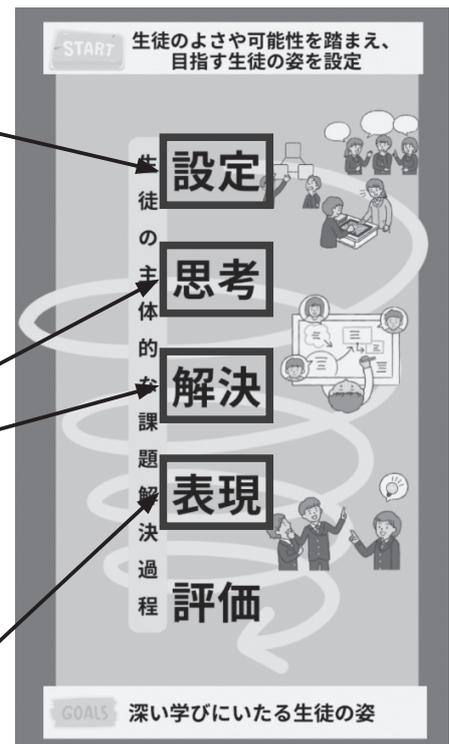
自分と関連付けて考えられる課題を設定し、観点を明確にして、文章と対話しながら自分の考えをもてるようにします。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.8・10）

グループで互いの根拠・理由・考えを比較しながら対話し、課題についての考えを練り上げます。ホワイトボードや付箋を使って互いの考えを可視化し、考察のポイントを明確にししながら、思考の深化を促します。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.13・15）

話し合いの結果をもとに、自分や文章と再び対話し、自分の作品観を、根拠を明確にしてまとめます。



単元(題材)の様子

① 単元を貫く課題として「『おくのほそ道』を「〇〇な後輩」に薦める「読書推薦文」を作ろう」を提示します。「〇〇」は、生徒が自分で設定します。(例:旅に出たい後輩、俳句が好きな後輩)

立場: 芭蕉とともに旅をした人

発信する相手: これから『おくのほそ道』を読む2年生後輩

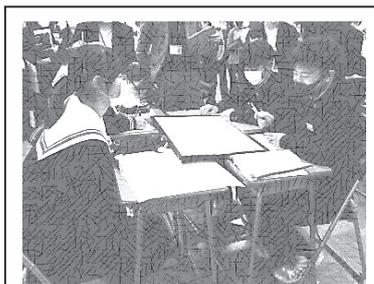
の2点を明確にし、課題に対する主体的な取組を促します。江戸時代に書かれた作品が今なお人々の心をとらえ続けているのはなぜだろうと投げかけ、現代に生きる自分と対比・類比しながら、『おくの細道』の魅力を探り、読み進めていきます。

ポイント1

② 歴史的背景等の基礎知識を確認した後、地の文から読み取れる芭蕉の思いを、根拠・理由・自分の考えを明確にして整理します。

グループ活動や全体的話し合いでは、ホワイトボードや付箋等を用いて互いの考えを可視化し、考えの深化を図ります。

ポイント2



昨年度プレ授業時
グループ活動の様子

③ 地の文から読み取った芭蕉の思いと重ね合わせながら、俳句に込められた芭蕉の思いを考えます。1学期の俳句学習を生かし、芭蕉の俳句の良さは何かを自分なりに考え、まとめます。

ポイント2

研究会

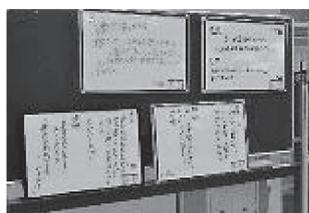
本時の課題

「あなたが旅の同行者なら、旅立つ芭蕉に対してどんなことを思うだろう」

④ 自分がこれから芭蕉とともに旅に出る立場に立つとしたら、芭蕉に対してどんな思いをもつかを出し合います。それらを

A プラスの感情 B マイナスの感情 C その他

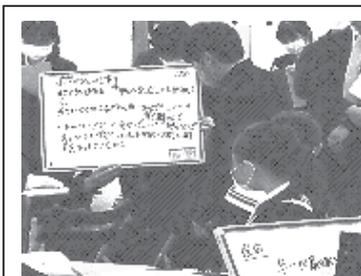
に分類し、ABCのいずれかの立場を選んで、旅立つ芭蕉をどのように見るかを、前時までにとらえた芭蕉の思いをもとに考え、表現します。



昨年度プレ授業時の様子

⑤ グループ活動で、根拠を確かめながら互いの考えを伝え合い、ABCそれぞれの視点から、「芭蕉の行動や思い」に対する考えを広げたり深めたりします。

⑥ 交流で得た考えを自分の表現に生かしながら文章を完成させ、発表し合います。



昨年度プレ授業時
全体での発表の様子

ポイント3

⑦ 「夏草」「光堂」の部分から、さらに芭蕉の思いや表現の工夫を考え、ともに旅をしている立場で、芭蕉への思いを表現していきます。冒頭から光堂にかけて、「旅の同行者としての自分」の芭蕉への思いの変化を確かめ、最後に、『おくの細道』を後輩に推薦する文章を、200～300字でまとめます。自分の作品観を、推薦文を書くことを通して整理し、互いの作品観を交流しながら、『おくのほそ道』の魅力を確認し合います。

ポイント1・2・3

国語 <中越地区／魚沼市中教研>

11月1日(金) 研究会開催

研究主題：情報を整理し、自分の考えを表現できる生徒の育成

単元名：「3年：複数の情報を関連づけて考えをまとめる」
～「魚沼紹介ポスター」を作ろう～

会場校：魚沼市立小出中学校

公開：1学級

授業者：山本 祐作

指導者：中越教育事務所 学校支援課第2課長 山崎 寿徳様
魚沼市教育センター

統括指導主事 江田 浩様



研究推進責任者
魚沼市立堀之内中学校
北村 紗月



教科・領域担当者
魚沼市立小出中学校
山本 祐作

こんな深い学びの姿を目指します

話や文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて整理することが、自分の思いや考えを明確なものにすることにつながると考えます。本単元では、自分で情報を収集・選択し、それを根拠に自分の考えに論理性をもたせて伝える姿を目指します。また、他者との交流を通して、多面的な視点で自分の考えを吟味し、深める姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1(「深い学びの技法」のNo.3)

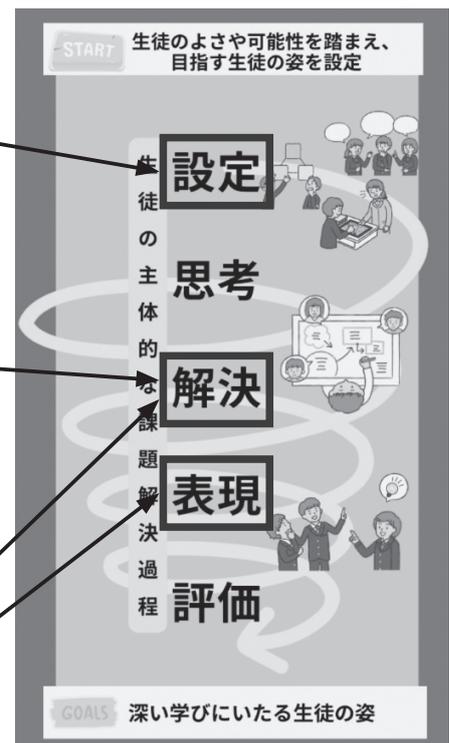
情報を読み取る際の視点や観点を理解し、情報の信頼性の確かめ方を捉える。

ポイント2(「深い学びの技法」のNo.9)

目的や意図に応じて文章を適切に選択・活用し、効果的な表現の方法について考える。

ポイント3(「深い学びの技法」のNo.13・10)

意見と根拠を明確にしながらか、論理的に自分の考えを伝える。また、話し合い活動を通して自分の考えを練り上げる。



単元(題材)の様子

①②③ 「情報社会を生きる－メディアリテラシー」の読みを通して、情報とは送り手によって「構成されたもの」であることを学んだ後、「広告の読み比べ」を通して、どのような意図で情報が構成されているのかを、観点を設定して比較します。2つの資料の読みを通して、情報の受け手としての視点を実感的に捉えます。

ポイント1

④⑤ 情報が送り手によって「構成されたもの」であること等、受け手としての視点を学んだうえで、「魚沼紹介ポスター」の案と構成シートを作成します。作成においては、情報の送り手として、文章の種類を選択、意見と根拠の関係、情報の信頼性などを観点に、目的、相手に応じた内容、方法を吟味します。これによって情報の送り手としての適切な判断を身に付けます。

情報収集の様子
(昨年度の実践より)

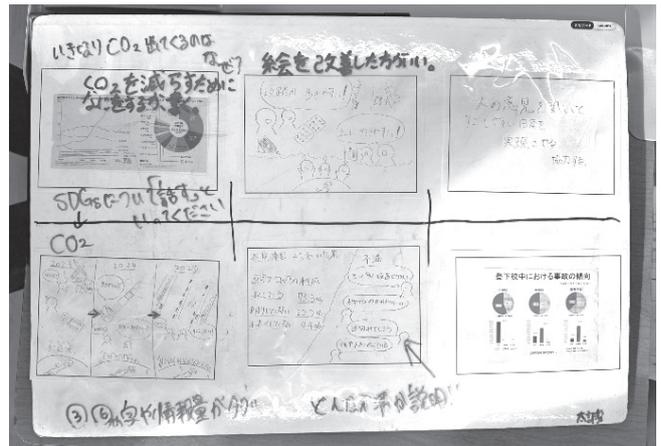


ポイント2

研究会

⑥ ポスターの案を作成したら、「まなボード」を用いて互いの案についてペアで検討を行います。ポスターの内容を伝える際には、収集した情報を根拠に、自分の伝えたいことを論理的に説明します。検討時には、選択した資料やその配置は適切か、意見と根拠に整合性はあるか、情報の信頼性はどうかなどをチェックし、相手の「まなボード」にアドバイスを記述します。複数回繰り返し、自己の考えを見つめ、推敲する活動へと繋げていきます。

まなボード (昨年度の実践より)



ポイント3

⑦ ワークシートを用いてペアでポスター案を検討した後、その内容をもとに「魚沼紹介ポスター」を作成します。

⑧ 作成したポスターを発表し合います。発表後は、ポスター案の検討やポスター作成を通して学んだこと、他者の発表を聞いて学んだことをもとに振り返りを記述します。

発表の様子 (昨年度の実践より)



国語 <新潟地区／新潟市中教研>

11月7日(木) 研究会開催

研究主題：学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を使って考えを深め、自らの成長を実感する国語科授業

単元名：「2年：漢詩の風景」
「3年：君待つと－万葉・古今・新古今」

会場校：新潟市立東新潟中学校

公開：2学級

授業者：堀川 航矢・土屋 明善

指導者：新潟市立総合教育センター 所長補佐 長谷川 聡実 様
新潟市教育委員会 指導主事 志田 江利子 様



研究推進責任者
新潟市立濁川中学校
及川 陽子



教科・領域担当者
新潟市立東新潟中学校
小竹 玲子

こんな深い学びの姿を目指します

「漢詩の風景」では、よりよい表現方法について認識を深める姿を目指します。手立てとして、漢詩（漢詩風の詩）を創作し、練り上げる活動を組織します。この活動を通して、生徒は漢詩の創作においてよりよい表現を追求し、自他の表現のよさを認識することで、多様な表現の仕方や表現技法の効果について認識を深めます。

「君待つと」では和歌の表現の良さと普遍性を再認識する姿を目指します。手立てとしてテーマに沿った和歌のプレゼンバトルを行います。判定基準に基づき、表現の巧みさや詠まれた情景・心情などを考えることで、時を超えて読み味わうことができるものであるという和歌の普遍性についての認識を深めます

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

漢詩の風景

君待つと－万葉・古今・新古今

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.3）

既習事項を整理し、そこから表現のもととなる基準を設け、それに沿って表現する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.8）

対象と言葉、言葉と言葉の関係を意識しながら、他者の意見に触れ、自身の意見と比較し良さを考える。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.10）

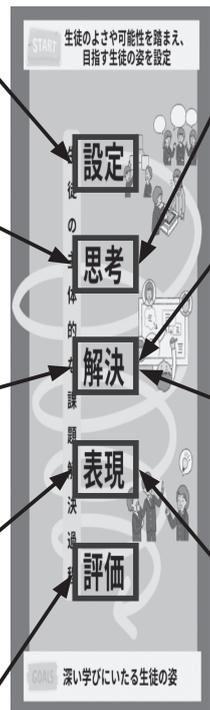
表現の工夫や効果などについて読み手からの助言などを踏まえ、良い点や改善点を見出す。

ポイント4（「深い学びの技法」のNo.15）

表現の効果などを考えて描写し、自分の考えが伝わる文章になるよう工夫する。

ポイント5（「深い学びの技法」のNo.19）

作成した文章を振り返ることで、言葉がもつ価値を認識し、その能力の向上を図る態度を養う。



ポイント1（「深い学びの技法」のNo.5）

目的や場面に応じて話題を決め、話し合う材料を収集・整理し、伝え合う内容を検討する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9）

論理の展開などを考えて、話の構成を考えたり、工夫したりする。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.10）

表現の工夫や効果などについて読み手からの助言などを踏まえ、良い点や改善点を見出す。

ポイント4（「深い学びの技法」のNo.13）

自分の立場や考えを明確にし、相手を説得できるように論理の展開などを考えて、話の構成を工夫する。

単元(題材)の様子

漢詩の風景

①～③ 白文、訓読文、書き下し文を比較し、漢詩で使われている表現方法と起承転結、押韻、対句など現代の表現技法の共通点を考えます。多くの表現技法が現代でも使われていることに気づくことで、漢詩表現の奥深さを感じることができます。

また、訓読文、書き下し文が白文のリズムを感じさせる優れた表現方法であることにも触れ、漢詩の創作につなげます。

④ 孟浩然「春暁」杜甫「絶句」の漢詩をもとに、漢詩の表現の工夫を使い、漢詩を創作します。この活動を行うことで練り上げられた一字の大切さや作者の思いに触れることで、現代と共通する価値観・異なる価値観があることに気づくことができます。

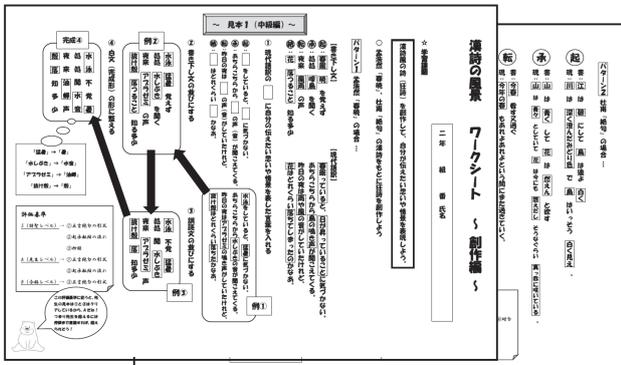


ポイント1・4

研究会

⑤ 創作した漢詩を評価基準に基づき、グループで相互評価、推敲し合います。この活動を行うことで表現の効果などを再確認しつつ、読み手(仲間)からの助言を踏まえ、作品をよりよいものにします。互いに評価、推敲し合うことで、自己の心情に迫り、お互いの個性を見つけることができます。また、言葉を吟味することでより深い学びの姿が形成されます。

ポイント2・3・4



⑥ 創作した漢詩を作品集にまとめ、振り返りを行います。この活動を行うことで、言葉のもつ価値について再認識し、次の活動へと繋がります。

ポイント2・5

君待つと - 万葉・古今・新古今

①② 「仮名序」の内容に触れ、和歌の本質を理解します。その上で教科書の和歌を読み、内容を把握します。その後、とらえた内容への疑問点を挙げ、クラスで共有します。

③～⑤ 和歌の良さを伝えるプレゼンバトルを行うための資料作りを行います。この活動を行う際、判定基準をクラスで共有し、それに基づいた資料を作成します。この活動を通して、目的意識をもって話し合い活動を進めることができるようになります。

ポイント1

⑥ プレゼンで使用する資料や発表パフォーマンスがよりよくなるようグループ内で練り上げます。この活動を行うことで、相手を意識した発表をし、相互評価させることで、良い点や改善点を見出し、質の高い表現活動ができるようになります。

ポイント3

⑦⑧ 調べた和歌を「言の葉バトル」と称してプレゼンバトルを行います。バトルでは、聴衆を説得する効果的な資料の提示や納得できる根拠のある説明をします。この活動によって根拠のある説明をすることはもちろんのこと、聞き手として聞き取った内容や表現の仕方を評価することで、作者の心情に迫り、読みを深めることができます。

ポイント2・4



⑨ 学習の締めくくりとして、和歌の発表をもとに心に響いた一首を選び、鑑賞文を書き、作者の心情や表現の工夫を振り返ります。

国語 <下越地区／新発田市中教研>

11月27日(水) 研究会開催

研究主題：これまで身に付けてきた読みの力を働かせ、課題解決に向けて主体的に学習を進められる国語科授業

単元名：「3年：故郷」

会場校：新発田市立加治川中学校

公開：1学級

授業者：須藤 里香

指導者：胎内市立中条中学校 校長 森谷 優子 様



研究推進責任者
新発田市立東中学校
五十嵐 美波



教科・領域担当者
新発田市立加治川中学校
須藤 里香

こんな深い学びの姿を目指します

研究推進委員会では、生徒の深い学びの姿を「個別最適な学びの姿の実現」と捉えました。生徒自身が、自分の学習の進め方を選んだり決めたりしながら主体的に課題解決に向かう姿を目指します。主体的に学習を進めるためには、生徒がこれまで身に付けてきた「読みの力」を自覚し、活用していくことが重要です。ICTを利用して、学習ログを蓄積・再構築・活用したり、仲間と協働的に学んだりすることによって、主体的に課題解決に向かう生徒の姿を目指します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1）

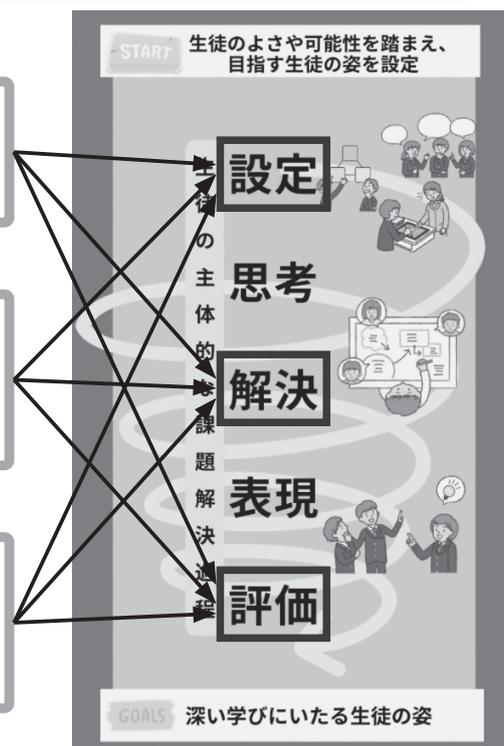
生徒自身の問いを元に「追究課題」を設定する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9）

生徒一人一人が自らの学習ログを活用して課題解決に向かう。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.18）

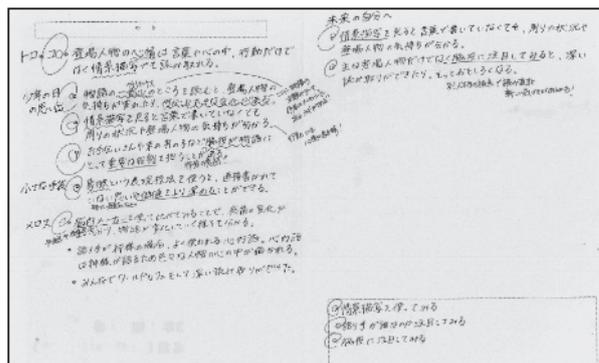
学習をとおした読みの広がりや深まりを評価し、次の学習に生かせるように学習ログを残す。



単元(題材)の様子

これまでの物語単元でタブレット端末に蓄積してきた学習ログを振り返り、紙媒体に再構築して「わたしの国語学習 物語編」にまとめます。これにより、生徒は自分が身に付けてきた「読みの力」を自覚します。「わたしの国語学習 物語編」は、生徒が自ら選んだり決めたりして自らの学習を調整し、個別最適な学びを実現するための支援ツールです。生徒はこれを活用して単元の学習の計画を立て、見直しをもちます。学習中はいつでも手元にあり、必要に応じて見返したり、自分がログを残したいタイミングで内容を付け加えたりします。

学習成果物の整理や共有が容易であるというICTの強みを生かし、学習ログを意図的に蓄積することで、国語科において課題とされる系統的な学びをサポートします。



「わたしの国語学習」(昨年度の実践より)

私の国語学習
～物語・小説編～

3年 組 番
名前()

ポイント1

ポイント2

ポイント3

- ①～④ 学習ログを活用して学習計画を立て、これまで培ってきた知識や学び方を使い、時に仲間と協働的に学びながら課題解決に向かいます。教師主導の学習ではなく、自立した読み手として、主体的に物語を読み深めていく姿を目指しています。

学習ログで着目の仕方を振り返り、辞書等を活用しながら本文を読み進めます。気付いたことや疑問等を教科書に書き込み、初発の感想を書きます。

物語の設定や構成を確認し、自分の問いをもとに追究課題を設定します。

授業の様子(昨年度の実践より)



研究会

- ⑤～⑥ 前半は自分の計画で一人一人が問いを追究します。後半は、語り合う時間を設定し、自分の立てた問いとその解釈を仲間に伝え、自分の考えを広げたり深めたりします。

語り合いの様子
(昨年度の実践より)



- ⑦ パフォーマンス課題として、「故郷」の魅力語る批評文を書きます。
⑧ 単元を振り返って読みの広がりや深まりを言語化します。さらに、単元をとおして身に付けた「読みの力」をメタ認知し、「私の国語学習 物語編」に学習ログを付け足したり再構築したりすることで、次の学習に繋がります。

単元を貫く手立て

数学

数学的活動の充実を目指して

～「数学化」の過程に焦点を当てて～

学習指導要領数学科の目標のとおり、数学的に考える資質・能力を育むために「数学的活動」の充実は欠かせません。特に、数学的活動の初発となる問題発見・設定の場面において、生徒の関与の度合いを高め、主体的な学びの姿を引き出すことが大切です。各地区の実践をもとにその具体を考えてみました。



県中教研 数学部 全県部長
小千谷市立片貝中学校

校長 山本 俊介

数学科において「深い学びにいたる」とは

数学的活動は、「事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行すること」です。この過程が図1のようなイメージ図として示されています。

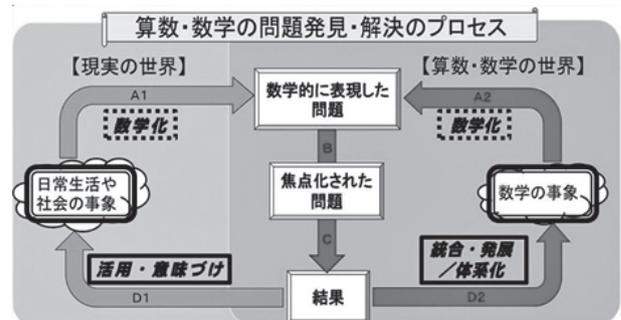
この図をもとにすると「深い学びにいたる」ということを次のように捉えることができます。

～「現実の世界」においては～

問題解決により得られた結果を解釈したり、類似の事象にも活用したりして適用範囲を広げる。
(図中のD1)

～「数学の世界」においては～

問題解決により得られた結果を振り返り、統合的・発展的に考察したり、体系化して捉え直したりする。
(図中のD2)



【図1】

したがって、「深い学びにいたる」ためにはイメージ図に示されたサイクルを意識した授業構想が大切であると考えます。このサイクルを回す上で特に重視すべきは、サイクルのスタートに位置付く問題発見・設定の場面です。この場面で大切なことは、生徒主導、または生徒と教師が合意しながら事象を数学の舞台に上げる「数学化」(図中のA1・A2)のプロセスを丁寧に行うことです。このことにより、生徒の課題への関与度を高め、主体的な課題解決へとつなげることができます。また、生徒は、初発の「日常生活や社会の事象」「数学の事象」をより強く意識して問題解決に取り組みます。よって、解決後にはその事象について振り返ったり、その事象と結果を関連付けたりして学びを深め、広げることができます。この具体については、各地区の1年次研究の実践を例に説明します。

「日常生活や社会の事象」の数学化について

「日常生活や社会の事象」を題材とする場合、数学の世界から離れた所にある事象を生徒自身が「数学的に表現された問題」として数学の舞台に上げるように導入を構想する必要があります。

右図は、上越地区で公開された1学年「比例の利用」の授業をもとに、課題設定の場面を改めて構想したものです。授業は、使用年数と燃料費(累積)との比例関係に注目し、電気自動車とガソリン車のどちらを購入すべきか考えるものです。「車の購入」という日常生活の事象の中から、生徒が数学的な見方・考え方を働かせながら問題を見いだしていきます。

教師が予め数学的に加工した問題を提示して問題解決をスタートするものではありません。現実の世界の事象に対して、生徒が数学的な見方・考え方を働かせながらその中に潜む追究すべき事柄を探り、問題として設定し解決をスタートさせる過程を丁寧に進めることが大切です。

解決後には導き出した結果を踏まえ、初発の事象にもどり車の使用年数を想定しながら車体価格と燃料費の兼ね合いからどちらの車を購入するか検討する学習につなげることも考えられます。

【実践例】1学年「比例・反比例」

日常生活の事象 電気自動車とガソリン車のどちらを購入するか。【生徒】

【教師】 車を購入するとき考えるべきことは？ 生徒が必要な数値を考慮する必要があるか？

	電気自動車	ガソリン車
車体価格	400万円	280万円
燃料費(年毎)	3万円	12万円

このデータに基づいて、生徒が変量を抽出する

【生徒】 車体価格は購入時に払うので変わらないが、燃料費は使用年数が増えれば変わってくる。

どちらの車を購入するか判断するときに、使用年数が増えると燃料費がどれだけかかることになるか考える必要があるようだ。

数学的に表現した問題

電気自動車とガソリン車について「使用年数」に伴う「燃料費(累積)」の変化の様子を表、式、グラフを利用して比較してみよう。

「数学の事象」の数学化について

「数学の事象」を題材とする場合、始まりは既習事項である場合が多いです。既習事項から生まれた新たな問いをもとに、生徒自身が「数学的に表現された問題」を設定し、追究が始まるように導入を構想します。

右図は、中越地区で公開された2学年「三角形の角」の授業をもとに、課題設定の場面を改めて構想したものです。授業は、三角形の内角の和が 180° であることを既習の図形の性質を使って説明するものです。導入にあたって、まずは既習の「平行線の性質」を同側内角に注目して見つめ直します。そして、このことで得られた図形の角の性質を捉える新たな視点(「角の和が一定である」)で、条件変更をしながら三角形の内角についての追究へとつなげていきます。

既習事項に対して、生徒が数学的な見方・考え方を働かせ、新たな視点で見つめ直したり、違う視点で捉え直したりして、気付いたことをもとに追究すべき新たな問題が生まれてくるようにします。

問題を解決した後は、結果を初発の事象に適用し、右のように既習事項と統合させる学習へとつなげることも考えられます。

【実践例】2学年「いろいろな角と多角形」～三角形の角～

数学の事象 既習の角以外の角(同側内角)についての平行線の性質【生徒】

【教師】 既習の角以外の角についての性質はないだろうか？

$a + b = 180^\circ$ になる。

「角の和が定」という新たな視点

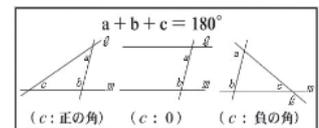
$a + b = 180^\circ$ とはならなくなる。

$a + b + c = 180^\circ$ が言えそうだ。

【生徒】 a と b が平行でない場合でも、新たにできる角を含め「角の和が 180° 」であると言えるか調べてみる必要があるようだ。

数学的に表現した問題

右の図で、 $a + b + c = 180^\circ$ であることを平行線の性質などを使って説明しよう。



数学 重点方針

「数学的な見方・考え方」「数学的活動」をより意識した授業づくりを推進し、数学的に考える資質・能力の育成を目指す。

- 数学的活動における「数学化」の過程を大切にして、「数学的に表現された問題」の設定に生徒が主体的に関わることができるようにする。
- 「数学的な見方」「数学的な考え方」それぞれの側面を踏まえ、数学的活動の適所に「数学的な見方・考え方」を働かせる機会を意図的に設定する。
- 問題発見・解決の過程において働かせた見方・考え方を振り返る場面を設定し、「数学的な見方・考え方」をより豊かなものとして生徒への蓄積を図る。

数学 <上越地区／上越市中教研>

11月12日(火) 研究会開催

研究主題：深い学びに向けた数学的活動の工夫
～批判的思考の育成を目指して～

単元名：「2年：データの分布」

会場校：上越市立城北中学校

公開：1学級

授業者：北 健太郎

指導者：上越教育事務所 指導主事 松浦 康平 様



研究推進責任者
上越市立直江津中学校
鬼木 彩織



教科・領域担当者
上越市立城北中学校
北 健太郎

こんな深い学びの姿を目指します

資料やデータを分析し、その傾向を読み取る活動を通して、多様な考えを認めながら、よりよく解決しようとする姿を目指します。また、他者の説明に対して安易に納得するのではなく、批判的に思考したり、検討したりすることで、数学的な見方・考え方を高めていきます。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.5）

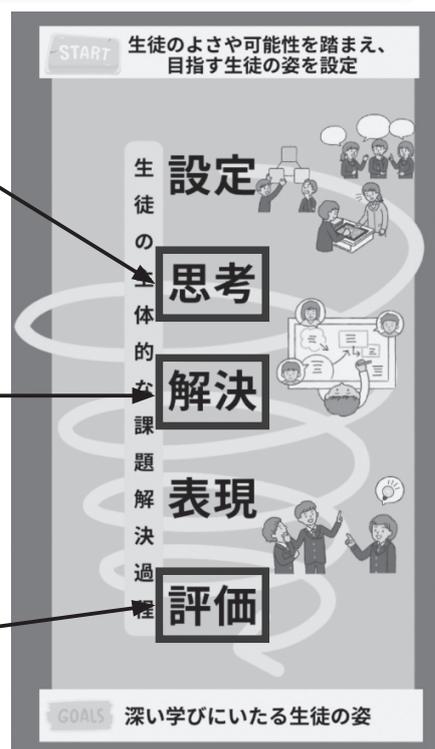
資料やデータに基づいて考察したり、検証したりする。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9）

学んだ知識や技能を活用して思考したり、表現したりする。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.17）

提示された資料や説明などを批判的に吟味検討する。



単元(題材)の様子

紙飛行機の飛行距離実験を行い、学習者用端末を用いて生徒自身が収集したデータの分析・考察をします。これにより、生徒は与えられたデータを分析するよりも主体的に課題に取り組むものと考えます。また、確定的な答えを導くことが困難な事柄について、その傾向を分析・考察することを通して統計的に問題解決することの有
ポイント1
用性を感じることができると考えます。



実験結果をもとに自分たちの班の紙飛行機のデータについて分析・考察した結果をまとめ、プレゼンテーションを行います。この過程において、箱ひげ図やヒストグラム、代表値などを用いて多面的に傾向を読み取り考察する力を育てます。また、生徒が自分の予想や判断について根拠を明らかにして他者にわかりやすく説明する力も育てます。箱ひげ図などを作成することだけが目的にならないように、不確定な事象を捉え説明することを重視し
ポイント2
ていきます。

他の班のプレゼンテーションを受け、自他の紙飛行機についての分析・考察の結果を比較・検討します。このことにより、他者の考えを聞き、新たな考えを取り入れることで、自分の考えを見つめ直し、再度考えを吟味します。そして、課題の内容や目的に応じて、根拠を明確にしてよりよい判断ができるようにし
ポイント3
ます。



研究会

研究会当日は、ポイント2とポイント3の場面を公開する予定です。

箱ひげ図やヒストグラム、代表値を用いて、それらからデータの分布の傾向を読み取ることで、自他の紙飛行機の飛行距離の実験結果について批判的に考察し、より適切な判断をしていく生徒の様子をご覧ください。



数学 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

11月13日(水) 研究会開催

研究主題：深い学びを実現する指導の工夫
～数学的な見方・考え方を働かせる
学習過程を通して～

単元名：「3年：図形の相似」

会場校：長岡市立刈谷田中学校

公開：1学級

授業者：岩崎 真理子

指導者：新潟大学教職大学院 准教授 阿部 好貴 様



研究推進責任者
長岡市立宮内中学校
星野 志保



教科・領域担当者
長岡市立刈谷田中学校
岩崎 真理子

こんな深い学びの姿を目指します

数学的な見方・考え方を働かせて、既存の知識がどのように使えるか見通しを立て課題を追究する姿を目指します。具体的な数値で考えるとわかることも、一般化する際には新たな課題となることがあります。生徒は既習事項を組み合わせることで課題の追究に向けた見通しを立て、試行錯誤しながら証明をつくり上げていきます。個々の実態に応じた説明や証明の構成が見出される過程で「深い学び」が実現します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1(「深い学びの技法」のNo.2)

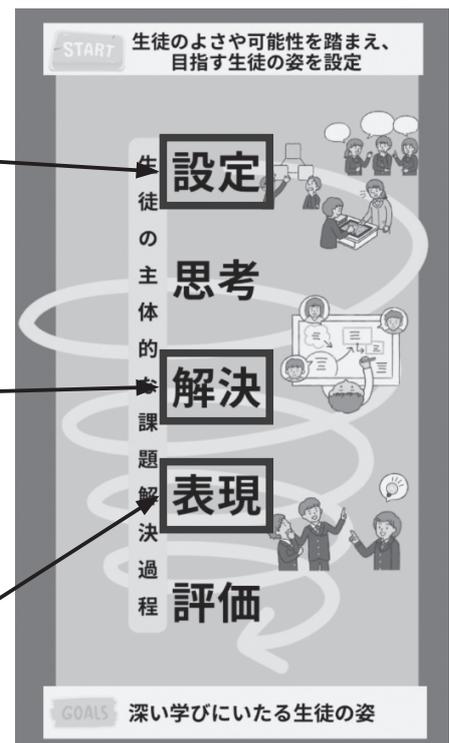
図形の性質が常に成り立つために証明の必要性を感じる課題を設定する。

ポイント2(「深い学びの技法」のNo.9)

結論を導く見通しを立てるために既存の知識を確認する。

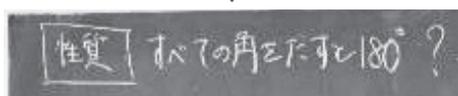
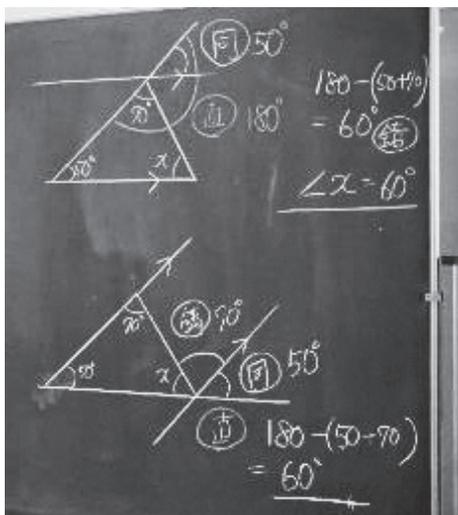
ポイント3(「深い学びの技法」のNo.13)

論理的な証明にするために定義や定理を根拠とした説明を行う。



単元(題材)の様子

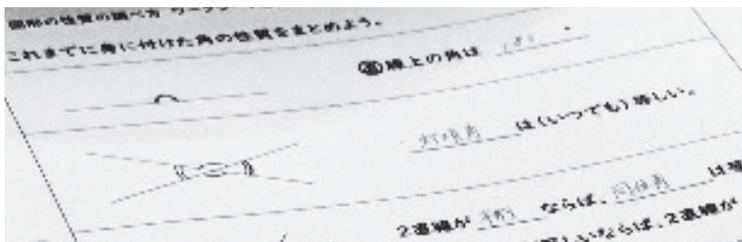
ポイント1



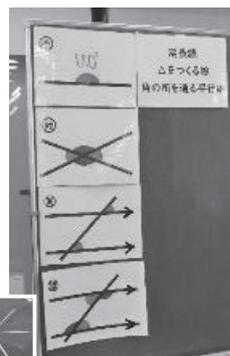
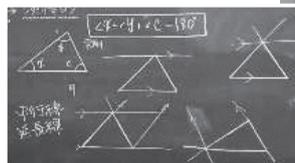
具体的な数値を使った求値問題や条件を限定した問題などで既習事項を想起させます。その上で、問題から見いだされた事柄がどんな場合でも成り立つか問いかけます。

既習事項から新たな問い(一般化の必要性など)が生まれたり、既習事項だけで簡潔に説明できない違和感を認識したりすることが、証明することの必要感へとつながります。

ポイント2

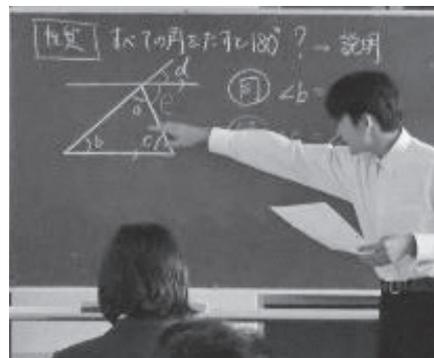


新たな課題を追究する見通しを立てるために、これまで学んできた知識を確認します。自らが使える道具(定義や定理)を認知することにより、どのように組み合わせて課題に立ち向かっていくか、方向性を見出せるようになります。



ポイント3

定義や定理などを根拠にして、一般的に成り立つことを説明します。すぐに論理的な証明の形にならなくても自分なりの表現で伝えることを重視します。



説明を周りの生徒と共有する過程を通して、より論理的な証明を組み立てる力を育成します。

研究会

相似な図形の性質や2学年で学習した図形の基本的な性質をもとにして、線分の比を用いて2直線が平行であることの証明を考える授業を予定しています。

生徒はこれまでに学んできた知識を組み合わせながら、どのように証明すればよいかを考えます。さらに、他の生徒と解決の過程を共有し、自他の考えを比較することを通して、自分の言葉でより論理的な証明ができるようにします。



数学 <新潟地区／新潟市中教研>

11月7日(木) 研究会開催

研究主題：数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業

～「課題設定」「見通し」「まとめ」に注目した授業改善～

単元名：「1年：変化と対応」 授業者：渡辺 大樹

「2年：図形の調べ方」 授業者：古川 智子

「3年：関数 $y=ax^2$ 」 授業者：工藤 貴史

会場校：新潟市立内野中学校

公開：3学級

指導者：新潟市立総合教育センター 指導主事 熊谷 友良 様



研究推進責任者
新潟市立上山中学校
関谷 卓也



教科・領域担当者
新潟市立内野中学校
斎藤 麻子

こんな深い学びの姿を目指します

数学科における「深い学び」とは、『数学的な見方・考え方を働かせ、数学的に考える資質・能力を育成する学び』です。その実現には、数学的活動が欠かせません。

本研究では、①数学的活動の出発点である<課題>を生徒が設定する姿、②数学的な見方・考え方を働かせるための<見通し>を生徒がもつ姿、③培う資質・能力である<まとめ>を生徒が整理する姿を目指しています。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.1)

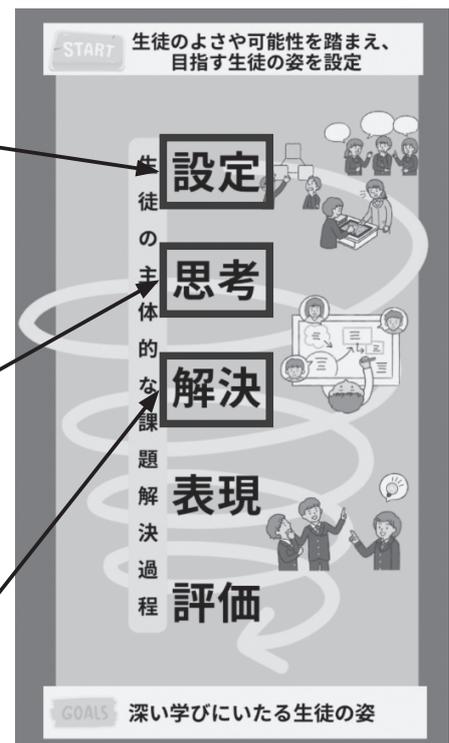
<課題設定> 予想とのズレ、既習とのズレを発展させ、「どのように」「なぜ」から始まる課題を生徒から引き出す。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.9)

<見通し> 既習を振り返ることを通して、生徒が働かせる数学的な見方・考え方を、方法の見通しとしてもたせる。

ポイント3

<まとめ> 「どのように」「なぜ」から始まる課題に立ち返るように促し、生徒から学習内容(資質・能力)を引き出す。





単元(題材)の様子 中1 変化と対応 ～反比例の導入の授業～

- ① 導入では「視力5.0を測るランドルト環の大きさを求めよう」という問題を提示しました。そして、実測を行い視力と直径の関係を整理しました。

そして、授業者が、「視力1.0の時の5倍だから、直径は3.75cmだ」と、比例の関係をそのまま適応させた誤答を提示しました。当然、生徒は視力と直径の関係が比例でないことを指摘します。

このようなやり取りを通して、既習である比例とのズレを發展させ「視力と直径にはどのような関係があるのだろうか?」という課題を生徒と設定しました。

ポイント1

問 視力5.0を測るランドルト環の大きさを求めよう。

視力	0.1	0.3	0.7	1.0	5.0
直径 (cm)	7.5	2.5	1.05	0.75	3.75

計算式: $7.5 \div 10 = 0.75$, $0.75 \times 5 = 3.75$

- ② 比例の学習の際から単元名である「変化(横の見方)と対応(縦の見方)」に着目を促してきました。

本時の問題解決においても、授業者は生徒に、比例の特徴を参考にして調べるように促しました。そして、横の見方で考えた人は赤で囲み、縦の見方で考えた人は緑で囲むように指示をして追究を促しました。

このように既習を振り返ると、生徒が働かせる数学的な見方・考え方を、方法の見通しとしてもたせることができます。

ポイント2

視力と直径の関係はなんでしょう?

視力	0.1	0.3	0.7	1.0	5.0
直径	7.5	2.5	1.05	0.75	?

計算式: $7.5 \div 2.5 = 3$, $7.5 \div 1.05 = 7.14$, $7.5 \div 0.75 = 10$

課題: 視力と直径にはどのような関係があるのだろうか?

視力	0.1	0.3	0.7	1.0	5.0
直径	7.5	2.5	1.05	0.75	?

関係式: $0.75 = \text{直径} \times \text{視力}$

- ③ まとめの場面では、課題「視力と直径にはどのような関係があるのだろうか?」に立ち返り、視力と直径の関係を横の見方・縦の見方のそれぞれでまとめるように促しました。生徒は右図のようにまとめることができました。

このように、「どのように」や「なぜ」から始まる課題を設定し、解決後に課題に立ち返ると、生徒からまとめを引き出すことができます。そうすることで、生徒は問題を解決する際に用いた数学を整理することができます。

ポイント3

<横の関係>
視力が3、4、5、...倍すると直径は $\div 3$ 、 $\div 4$ 、 $\div 5$ 、...になる

<縦の関係>
視力 \times 直径=0、75

研究会

研究会当日は、3つの授業を公開します。事前に指導案を読んだり、可能であれば事前に授業を実践してきてください。

当日は手立ての有効性や、よりよい指導の方法など、具体的な協議を行いましょう。また、研究会後、ご自分の授業で追試してみてください。

この研究会を通して、日ごろの授業を「数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する授業」に近づけていきましょう。



<昨年の一斉研修の様子>

数学 <下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研>

11月26日(火) 研究会開催

研究主題：数学的な見方・考え方を働かせながら、
課題解決を図る生徒の育成

単元名：「3年：相似な図形」～相似な図形の面積比～

会場校：五泉市立五泉北中学校

公開：1学級

授業者：知野 憲太

指導者：新発田市立東小学校 校長 五十嵐 潤 様



研究推進責任者
阿賀町立阿賀津川中学校
大竹 大智



教科・領域担当者
五泉市立五泉北中学校
知野 憲太

こんな深い学びの姿を目指します

「課題に対して既習事項等から総合的に判断し、自己との関わりを振り返る生徒」の育成を目指します。課題設定の場面では、事象の「数学化」の過程を大切に、生徒が主体的に課題と関わることができるようにします。課題解決の場面では、既習事項との関連を踏まえ互いの考えを説明したり、比較したりすることで自分の考えを見つめ直せるようにします。振り返りの場面では、単元を通してロイロノートに学びを蓄積させ、学んだことの体系化や事象への活用・意味づけを図ります。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1(「深い学びの技法」のNo.2)

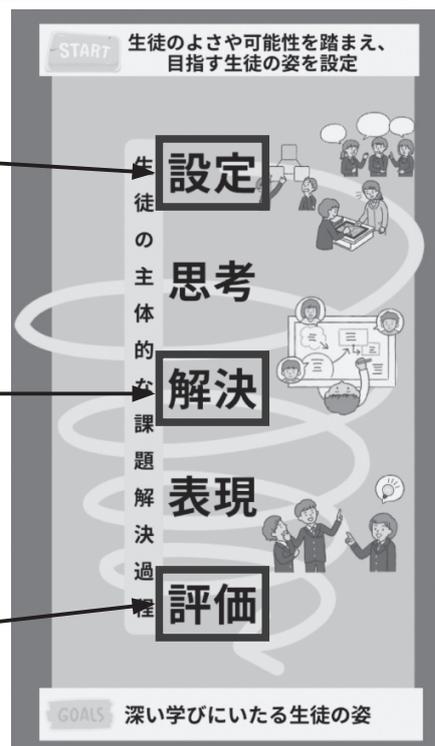
既習事項や疑問を確認して、学習の見通しをもち、課題の設定を行う。

ポイント2(「深い学びの技法」のNo.10)

いつでも仲間との対話や既習事項の確認ができる環境を整え、練り合いや練り上げをする。

ポイント3(「深い学びの技法」のNo.19)

学習成果を体系的に蓄積し、自己との関わりを振り返る。



単元(題材)の様子

課題設定の場面では、事象を「数学化」させるときに出てきたわかったことや疑問を整理し、全体で共有します。このことにより、課題の追究に向けた見通しを立てやすくし、より主体的に活動に取り組むことができるようにします。

ポイント1

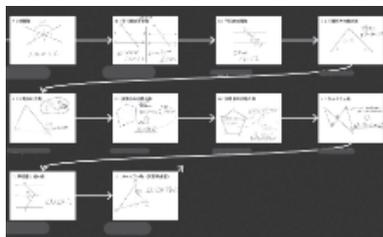


既習事項をいつでも確認できる環境を整えます。単元を通して、学んだ知識をICT機器に体系的に蓄積させます。また、それを授業中に必要に応じて確認することができるようにします。これにより、生徒は課題に関わる既習の知識や技能を関連付けることができ、統合的・発展的に考えることができるようになります。

ポイント1・2

授業の開始からグループを編成し、いつでも仲間と対話できる環境をつくります。発問や課題に対しての自他の考えを比較できるようにすることで、仲間との練り合いや練り上げを常に行えるようにします。

ポイント2



学んだ知識や技能をロイロノートに蓄積し、単元を通して学んだことを体系化していきます。

また、それぞれの過程で働かせた見方・考え方を振り返り、それらを生かして日常生活や社会の事象での「活用・意味づけ」につなげることができるようにします。

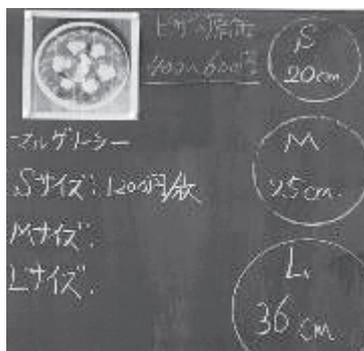
ポイント3

研究会

授業では、日常生活の場面として「ピザの販売」について扱います。

相似な図形の面積比を活用して、ピザのサイズと値段との関係について考えます。さらに、生徒たちはピザの新たなサイズと価格設定も考え提案します。

生徒たちが仲間と互いの考えを共有したり、比較したりしながら考えを深めることを目指します。



道徳

対話や語り合いをとおして、多面的・多角的に考え、深い学びにいたる授業づくり

「深い学び」の鍵になるのは「見方・考え方」です。これは道徳の目標に示された学習活動「様々な事象を、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方を考えること」のことです。

「見方・考え方」を働かせ、「対話」、「語り合い」、「自分事（自我関与）」、「多面的・多角的」をキーワードに「深い学び」にいたる授業づくりを進めます。



県中教研 道徳部 全県部長
新潟市立白南中学校

校長 和泉 哲章

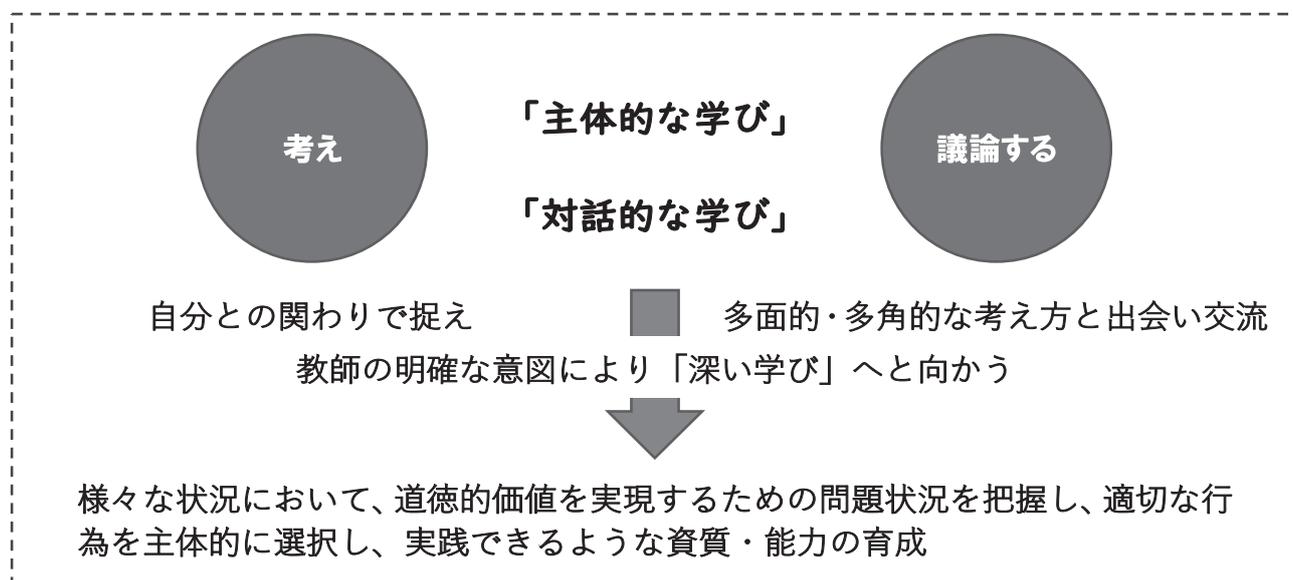
「主体的な学び」と「対話的な学び」をとおして「深い学び」へ

これまでの道徳授業では、主題の設定やねらいが不十分な単なる生活体験の話し合いの指導や読み物教材の登場人物の心情を理解するのみで終始する指導、望ましいと分かっていることを言わせたり書かせたりすることに終始する指導がみられ、道徳授業の課題でした。

深い学びの鍵である「見方・考え方」を深めるために「主体的な学び」と「対話的な学

び」が両輪になります。「主体的な学び」では自分自身が問題意識をもち、自分自身との関わりで考えさせる工夫が必要。また「対話的な学び」では、協働し対話させたり、多面的・多角的に考えさせたりする工夫が必要です。

このことから「対話」、「語り合い」、「自分事（自我関与）」、「多面的・多角的」といった言葉を授業改善のキーワードとして「深い学び」にいたる授業を構想していきます。



「見方・考え方」を働かせ、深い学びにいたる授業の工夫

「見方・考え方」を働かせ、深い学びにいたる授業づくりで押さえておきたいことがあります。

まず、「道徳的諸価値の理解を基に～」ということです。道徳的諸価値の理解では次の3つの理解を押さえておくことが肝要です。

- 人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解すること（価値理解）
- 道徳的価値は大切であってもなかなか実現できない人間の弱さなども理解すること（人間理解）
- 道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方や考え方は一つではなく多様であることを理解すること（他者理解）

次に「自分を見つめる」ということです。

キーワード：「自分事（自我関与）」

- 生徒の日常生活での経験や学校での共通体験を想起できる工夫を行うこと。
- 読み物教材等の登場人物に共感する事だけでなく、自分の体験から表現できるような

発問を工夫すること。

次に「多面的・多角的に考える」ことです。

キーワード：「対話」「語り合い」「多面的・多角的」

- 「対話」や「語り合い」を促すため、ペアや小集団などの学習形態を設定したり、ICTを活用し思考を可視化したりするなど工夫すること。
- 複数で話し合っただけでは「多面的・多角的」に考えたとは言えない。異なる立場や見方・考え方から考えられるよう工夫すること。
- 教師だけでなく保護者、地域住民、専門家等の参加を得て対話を促すよう工夫すること。

「多面的・多角的」に考えさせ、深い学びにいたるため、教師は生徒の話し合いを見取り、必要に応じて生徒が気づかないような新しい視点を投入して、議論を深めるよう工夫します。

「深い学びの技法20」と指導の手立ての工夫

本研究では、「深い学びの技法」を授業の中心的な手立てとして講じます。前述した様々な工夫も「深い学びの技法」を活用して授業を構想しています。

各地区で最も取り入れられる深い学びの技法は⑧「異なる多様な考えを比較してみる」です。⑦「視点の転換や逆思考をして考える。」と合わせて、多面的・多角的な思考を促す手立てです。また、①「学んだ知識を活用して

課題や目標を設定する」は、自分の問題意識をもたせることであり、⑬「学習成果と自己との関わりを振り返る」、⑮「自分の言葉で学んだことを整理しまとめる」と合わせて、自分事として考えさせる手立てです。そして、⑩「仲間と練り合いや練り上げをする」は、他者と多面的多角的な視点から検討することをおして、より深い学びを目指す手立てになります。

道徳 重点方針

- 1 校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、各校の実態を考慮して、重点目標を設定するなどして、道徳教育の全体計画及び年間指導計画を作成する。
- 2 自分事としての課題になるように、道徳的諸価値の理解を基にして、生徒の考えやこれまでの生き方を確認させるなどの働きかけを工夫する。
- 3 考え、議論させるために、多面的・多角的な視点からの重層的な発問や体験的な学習などを取り入れ、「自分を語る」授業を展開する。
 - ア 登場人物への自我関与中心の学習
 - イ 生きる上で出会う課題に対する問題解決的な学習
 - ウ 道徳的行為に関する体験的な学習

道徳 <上越地区／妙高市中教研>

11月22日(金) 研究会開催

研究主題：語り合いを通して、よりよい生き方を求める生徒の育成

題材名：「1年：もったいない」
「2年：夜の果物屋」
「3年：家族の思いと意思表示カード」

会場校：妙高市立新井中学校

公開：3学級

授業者：北島 大樹・山口 達也・岩片 仁美

指導者：上越市立板倉小学校 校長 廣井 弘敏 様
妙高市教育委員会 副参事 小出 信也 様
上越市立八千浦中学校 教頭 平野 彰子 様



研究推進責任者
妙高市立新井中学校
丸山 徹也



教科・領域担当者
妙高市立新井中学校
堀田 加奈子

こんな深い学びの姿を目指します

「深い学びの姿」を「語り合いを通して、よりよい生き方を求める姿」としました。自身の体験などから自分の思いを語り、また仲間の語りを聞くことで、道徳的な価値観の強化や修正を期待します。さらに、迷いや葛藤の中から自分事としてとらえることで本当の問いが生まれ、自分の生き方について深く考えることができるのではないかと考えます。「語り合い」を充実させ、物事を広い視野から「多面的・多角的」に考え、生き方についての考えを深める授業を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.7)

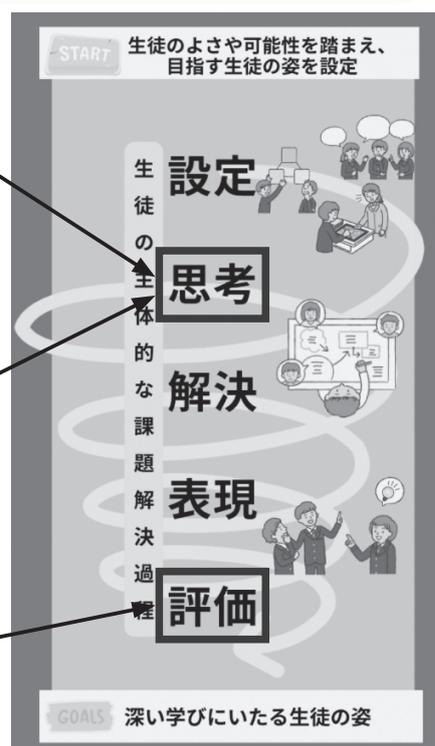
共感的発問、自己置換的発問や自由な思考を促す発問など、思考を促す問いを設定する。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.8)

深い学びに至るための語り合いになるよう話し合いのためのツール(ホワイトボードやICTなど)を活用する。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.19)

自分の思考と向き合うための振り返りの場面を十分確保する。



単元(題材)の様子

共感的発問、自己置換的発問や切り返しの発問を意図的に行うことで、生徒に自分事として考えさせることができ、問題意識を喚起します。

これにより、根拠をもとに交流することで、多面的・多角的な思考を促し、深い学びにつなげます。

ポイント1

【共感的発問の例】

「～はどんなことを考えていたか」

【自己置換的発問の例】

「自分が～だったらどう考えるか」

【切り返しの発問の例】

「もう少し教えてください」

「補足してくれる人はいませんか」

協働的に書く場面を設定することで多様な考えを交流することができます。例えば、充実した語り合いのためにホワイトボードや情報共有アプリを使用し、それぞれの考えを可視化し、「多面的・多角的」に捉えさせます。授業者がそれらについて、「どうのことですか」「もう少し話し合ってください」と問い返すことで、さらに議論が深まり、語り合いにつながります。

ポイント2



語り合いを通して、どんな気づきがあったのか、どのように考えを深める事ができたのかなど、授業のねらいに直結することを終末時に書く、「振り返り」の時間を十分に確保します。

このような自己内対話が、学びを深め、新たな見方、考え方への気づきを促し、道徳的実践力を高める契機となることを期待しています。

ポイント3



研究会

新井中学校では、毎回授業者が変わるローテーション道徳に取り組んでいます。授業者が相互に学び合い、授業力の向上を図ってきました。研究会では、各学年合計3学級の授業を公開します。語り合いを充実させる、対話方法などを工夫し、物事を広い視野から「多面的・多角的」に考え、生き方についての考えを深める授業を目指します。



道徳 <中越地区／見附市中教研>

11月20日(水) 研究会開催

研究主題：多面的・多角的に自己の考えを練り上げる
生徒の育成を目指して

題材名：「3年：サルも人も愛した写真家」

会場校：見附市立見附中学校

公開：1学級

授業者：3年 白井 拓己

指導者：上越教育大学教職大学院 教授 早川 裕隆 様
中越教育事務所 指導主事 丸山 俊 様



研究推進責任者
見附市立南中学校
川上 綾子



教科・領域担当者
見附市立見附中学校
早田 浩延

こんな深い学びの姿を目指します

価値観が多様に広がっていく社会の中で、「自分ならどうするか」という主体的な観点から道徳的価値と向き合い、他者の意見に触れることや「対話」を通して、自分にとっての新たな気づきや視野の広がりを得て、「多面的・多角的」に自分自身と道徳的価値の関わりについて捉え直したり、練り直したりしながら、自分はどうかを問い続ける生徒の姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.8)

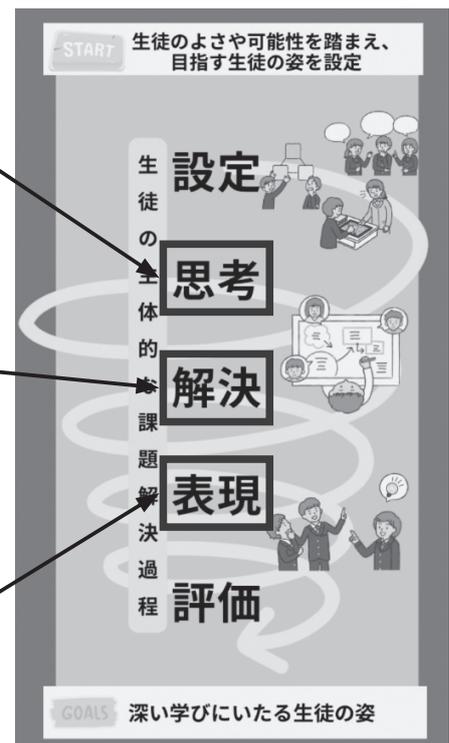
比較や視点の転換を意図した発問や資料で、多面的・多角的な思考を促します。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.10)

対話が深まるよう、「ICTでの意見の可視化」や「問い返し」を工夫します。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.15)

学習した内容を個に戻し、それぞれの納得解について考える時間を十分にもち、自分で語れるようにします。



見附市の研究の取組

道徳科の授業は、生徒の実態を把握したうえで、指導要領に示されている「内容項目の概要」と「指導の要点」を参考に、指導のねらいを立てて行われるものです。

本研究では、この「ねらいづくり」に重点を置き、市全体で研修を行いました。

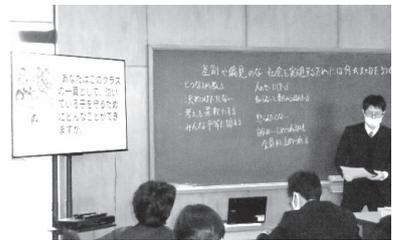
研究推進委員が作成した単元構想シートを用いて、授業者が教材に描かれている道徳的価値への理解を深めます。これは、授業者がファシリテーターとして話し合いをコーディネートするための大切な準備です。

<p>① 道徳構想シート</p> <p>教材名 わたしのせいじゃない</p> <p>価値項目 C-11 公正、公平、社会正義</p> <p>指導要領解説で大切にしたいキーワード</p> <ul style="list-style-type: none"> ・痛ったものの見方や考え方を避けるように努め、差別や偏見のない社会にしたいという思いをもつ ・多額の意見に同調したり、傍観したりする自分の弱さに向き合う ・「正義を信んじ」＝正しいと信じることを自ら積極的に実践できるように努める ・「公正さを信んじ」＝私心にとらわれて事実をゆがめることを避けるように努める 	<p>授業展開・流れ</p> <p>【テーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・差別や偏見のない社会を実現するために何が大切だろうか。 【資料提示】 ・「いじめ」がなぜ生まれたか考える。 ○1人1人の何が違ったのか考え、共有する。(スライド共有) ・「道徳者」「加害者」+「傍観者」=この中で止めることができるのは誰。 <p>③ 中心発問</p> <p>あなたはこのクラスの一員として、泣いている子を守るためにどんなことができますか。</p> <p>＜多面的・多角的に自己の考えを練り上げるための手立＞</p> <p>グループで意見交流をしてホワイトボードに整理させることで、自分たちができることについて、多面的・多角的に考えることができるようにする。</p> <p>＜振り返りの視点と自分ごとにするために＞</p> <p>仲間の意見を聞いて考えたことや、感じたこと、自分を振り返り、テーマについて書きましよう。</p> <p>＜多面的・多角的に自己の考えを練り上げるための手立＞</p> <p>全体で発表させることで、弱さを持っているのは自分だけではないと気付かせたり、差別や偏見のない社会の実現のための行動に繋がる思いを促させたりする。少しいの意見を共有し、積極的に実践できる態度につなげる。</p>
<p>主題名 差別や偏見のない社会の実現のためにできること</p> <p>本時のねらい</p> <p>① 子どもの評価する活動</p> <p>② 考える内容・知覚・価値理解</p> <p>③ 育てたい価値</p> <p>④ 育てたい価値の一端</p>	<p>8人の言動について聞いて、いじめを見過したり、関わろうとしないかたりする人物の心構の中にある弱さや、不公平がなぜ生じるのか考える活動を通し、</p> <p>なぜそれが許されないことなのか、育て見ゆめをせず、積極的に差別や偏見をなくすための努力をする意識を定着し、</p> <p>自分の仲の弱さを克服して、いじめを許さず行動しようという</p> <p>実践意欲を育てる</p>

見附市で作成した単元構想シート

研究会

本時のテーマは「自然との共生」です。松岡さんは『サルのため』と言って駆除に協力します。松岡さんの葛藤や苦しみを理解しつつも、実際は動物の命を奪っていることに矛盾を感じ、「自然との共生」とは人間の側の都合のいい言葉なのではないかと憤りを感じる生徒もいると推察します。このような問題は、身近な場所でも起きています。



1年次公開授業の様子

正解のない予測困難な時代を生きる生徒たちが、この課題を自分事として捉え、これからの自分の在り方を模索する契機となる「多面的・多角的に自己の考えを練り上げる」道徳科授業を目指します。



意見を交流し合う場面

教材本文を補足するような資料や異なる視点から考える材料となるような資料の提示、それらを生かした話し合いを通して、道徳的価値について多面的・多角的に思考する姿を目指します。

ポイント1

難しいと感じる選択や、道徳的価値観が対立するような内容を問うことで、生徒が「考えてみたい」「他の人の意見を聞いてみたい」と思う場面を作ります。

ICTを活用して意見を可視化することで、共感できる部分やそうでない部分、根拠の違い等が明確になり、生徒が自分の考えを捉え直したり、練り直したりすることができるようになります。このような対話を通して、道徳的価値への理解が深まることが期待されます。



可視化した意見を元に問い返す場面

ポイント2

課題となっている道徳的価値について、1時間の授業を通して繰り返し考えるよう促します。これにより、課題を教材文の中の出来事として終わらせず、自分事として考え続ける姿を目指します。

ポイント3

道徳 <新潟地区／新潟市中教研>

11月14日(木) 研究会開催

研究主題：豊かなかかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成

題材名：「2年：むこう岸には」
「3年：希望の義足」

会場校：新潟市立黒崎中学校

公開：2学級

授業者：堀口 健一・上野 由貴

指導者：新潟市立総合教育センター

指導主事 佐久間 奈々子様



研究推進責任者
新潟市立亀田西中学校
岡澤 唯子



教科・領域担当者
新潟市立黒崎中学校
河治 正人

こんな深い学びの姿を目指します

1時間目は他者との対話です。様々な意見を出し合い、共有する過程で、題材への理解を深め、そこから最適解を考える姿を目指します。

2時間目は他者や自己との対話です。前時の最適解に対して再検討を行う過程で、それまで気づけなかった自己に気づき、自分はどうかと考える姿、また、その気づきを踏まえて納得解を考える姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1(「深い学びの技法」のNo.1)

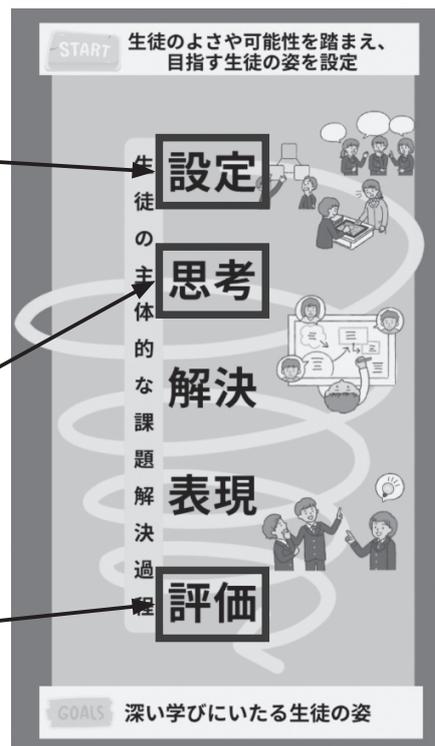
他教科で学んだ知識を想起させながら題材について考えられるようにする。

ポイント2(「深い学びの技法」のNo.8)

様々な意見を引き出すために、話し合いの方法や意見を共有する方法、発問を工夫する。

ポイント3(「深い学びの技法」のNo.19)

振り返りの「揺さぶりをかける発問」で、自己を深く見つめられるようにする。



単元(題材)の様子

題材への理解が深まるように、他教科でこれまで学習した内容を想起させながら進めます。

3学年「希望の義足」は、現実起きた問題が取り上げられている題材であるため、主に社会科で関連する内容を学習します。2学年「向こう岸では」は、抽象化された話です。主に国語科の関連学習(「思考の視覚化」「具体と抽象」)や1年時の「異文化の人々と共に生きる」を役立て、学習課題に入りやすくします。

ポイント1

少人数での対話場面を設定し、様々な意見を引き出します。引き続きそれを可視化し、全体共有しながら、問いを立てていきます。

これにより、題材への理解が深まり、学習課題に対して多面的・多角的にとらえながら思考することが可能になります。さらに問いを投げかけながら、個々の最適解へと導きます。

ポイント2



前時にまとめた最適解に対し、揺さぶりをかけるための問いを仕掛け、自己との対話へと導きます。生徒は他者の発言を聞きながら、自分はどうかと考え始めます。そのうえで、納得解へと導く問いを投げかけます。

これにより、生徒は自己との対話を通して、投げかけられた課題を自分事として捉え、自分の言葉で納得解を導き出していきます。

ポイント3



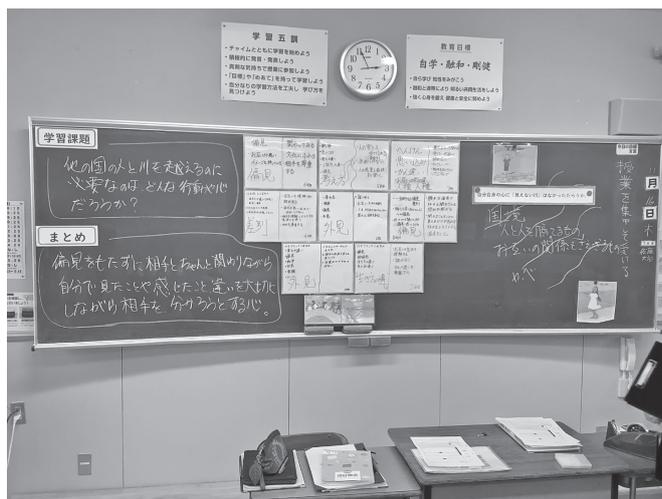
研究会

最適解を導く1時間目を経て、納得解を導くまでの2時間目を公開します。

校内研修で継続的に取り組んできた手立ての工夫「他教科で学んだ知識や過去の学びを生かす」「話し合い場面の方法や発問の工夫」「振り返りの発問の工夫」によって、生徒が新たな気づきを得て自己との対話を深め、これからの自分の生き方を見つめる姿を目指して準備しています。

国際理解・国際貢献という、生徒が自分事として関わるのが難しいテーマに取り組む際のヒントにもなればと考えます。

ポイント1・2・3



道徳 <下越地区／村上市・岩船郡中教研>

11月15日(金) 研究会開催

研究主題：多面的・多角的な視点をもって自己の生き方を見つめ、深い学びに向かう生徒の育成

題材名：「3年：人間の命とは」
～人間の命の尊さ・大切さを考える～

会場校：村上市立朝日中学校

公開：1学級

授業者：3年 加納 貴文

指導者：下越教育事務所学校支援第2課

課長 白澤 道夫 様



研究推進責任者
村上市立山北中学校
相馬 亮



教科・領域担当者
村上市立朝日中学校
五十嵐 雅人

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が他者との対話を通して異なる考えに触れることで、多面的・多角的な視点をもって自己の生き方を見つめ、深い学びに向かう姿を目指します。

生徒が自分の最初の考えを思い付きに留まるだけでなく、他者対話・自己対話の往還を通して、生徒は自分の考えを変容させたり深化させたりしながら自分事として考える姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.3)

「自分事としての課題」にするための授業展開を設定する。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.7・8)

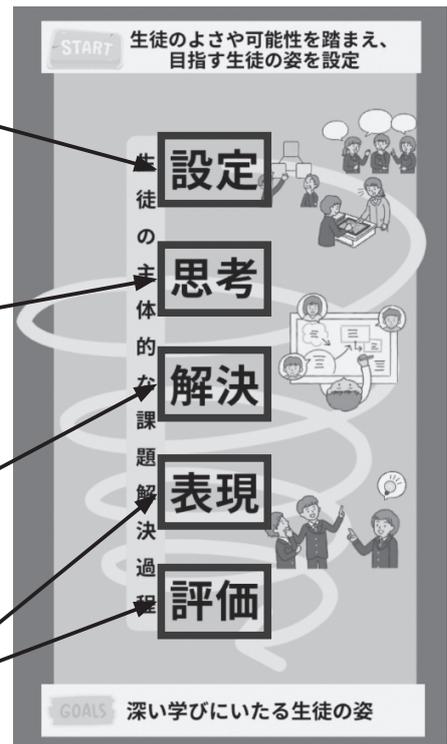
多面的・多角的な視点からの発問ができる場面を設定する。

ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.8・10)

他者対話・自己対話を設定する。

ポイント4 (「深い学びの技法」のNo.15・19)

自らの価値観を深める振り返りを行い、自己評価する。



単元(題材)の様子

① 資料を読み、登場人物の心情を捉えます。それぞれの思いや考えを整理します。心情メーターを使い、自分の立場を明らかにします。さらに赤と青の2色のコップを使い、他の生徒へも視覚的に自分の立場を表します。これにより、クラスの仲間はどのような心情にあるのか互いに把握できるようになります。

ポイント1



②～④ 多面的・多角的な視点から発問をします。医師や州の裁判所、患者の両親の立場から発せられる考えを客観的に捉え、重篤な昏睡状態である女性が、「何を望んでいるのか」、現時点での自分の考えをもちます。どの立場に共感できるか、心情メーターと2色のコップを使い自分の心情の変化に気付かせます。コップの使用で、自分だけでなく周りの生徒の心情の変化も捉えることができると考えられます。

ポイント2

○3つのキーワード

1 「問題解決」→問題意識をもてたか

・「道徳的な価値」に関する問題に自己の価値観をもとに気付くこと

2 「自分事」→当事者意識をもてたか

3 「多面的・多角的」

- ・ねらいとする道徳的価値を様々な面を考えている。
- ・様々な登場人物の立場で考えている。
- ・自分と他者の考えを比べて考えている。
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考えている。
- ・人間の強さや弱さなどを捉えて考えている。

⑤ 重篤な昏睡状態の女性を「自分の家族や大切な人」だと想定した、他者対話・自己対話の往還を通して、医師や裁判所、両親の立場に立ち、話し合いで対立意見をぶつけ合います。他者対話・自己対話をすることで考えが深化し、話し合いの中で心情の変化が起こることが予想されます。

ポイント3



○自らの価値観を深める振り返りを行います。更なる自己対話で考えを深め、生命の尊さについて「自分事」として考える力が育成されます。

ポイント4

研究会

⑥ 研究会のねらいは「多面的・多角的な視点」で、「自分事として」自己の生き方を見つめる」生徒の姿です。

様々な立場の考えに触れながら、生命の尊さについて考える授業を予定しています。

ポイント1・2・3・4



⑦ 生徒は自分の考えを最初の思い付きに留めるのではなく、他者との対話を通して異なる考え方に触れることで自分の考えを変容させたり、深化させたりしてきました。最終的に生命の尊さについて「自分事」として考えます。

美術

「想像」と「創造」の往還を通して、 見方や考え方、感じ方を深める授業

授業中に、こんな生徒はいませんか？

- 「こだわりが強く、進まない生徒」
- 「線1本さえ引かず、机に伏せる生徒」
- 「どうしたらいいか、すべて頼る生徒」

こんな場面こそ、意気を感じて思考！

授業者は生徒と向き合い、授業者自身とも対峙することが、表現に誘う入り口になります。

そんな感性豊かなひらめきから、授業が始まります。



県中教研 美術部 全県部長
五泉市立村松桜中学校

校長 稲生 一徳

見方や考え方、感じ方を深める「表現と鑑賞の相互の学習」

「美術を教える」から「美術を通して学ばせる」へと、授業者の意識改革が求められるようになり30年が経過しました。

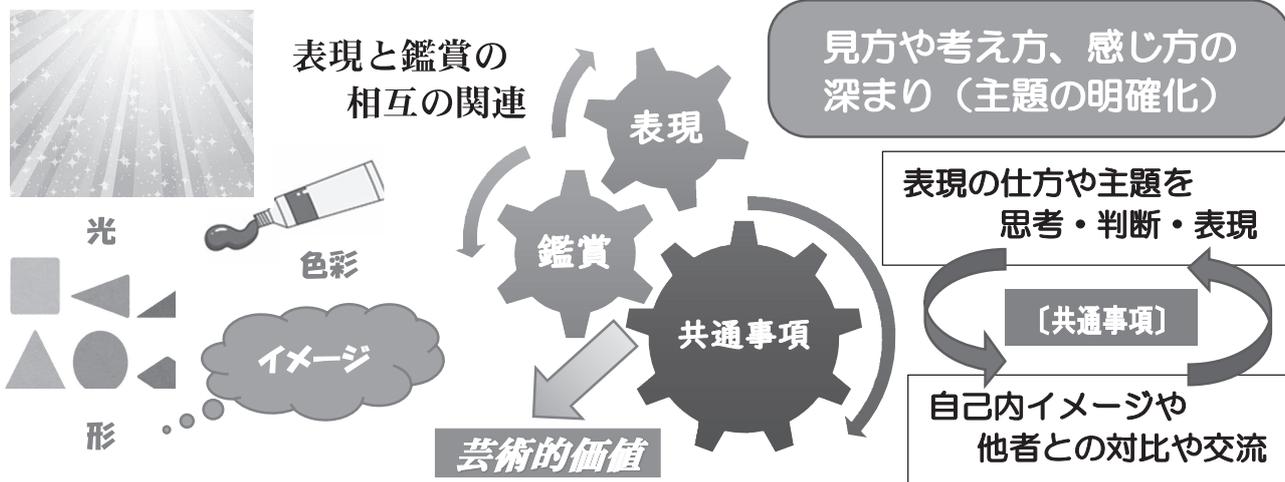
現行の学習指導要領の学習内容として、「見方や考え方」と、他教科にはない「感じ方」が示されていることが美術科特有の教科性です。

そして、「表現と鑑賞の往還を通して身に付ける資質や能力は、造形的な見方や感じ方である」と、〔共通事項〕に基づき明快に説

明できます。

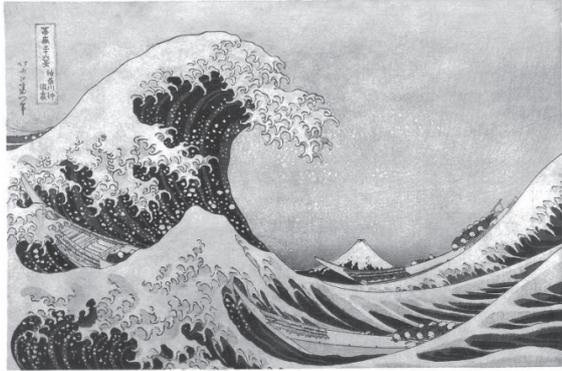
菅原先生（柏崎東中）の水墨画の授業、そして青木先生（新津第一中）のピクトグラムの授業ともに表現と鑑賞の相互の学習です。そして、指導計画に基づき造形的な見方や考え方、感じ方を深めていく授業です。

生徒が、自分にどんな資質や能力が身に付いたのか、自分の課題は何かなど、次の学習改善につながる視点をもたせることが評価の根拠になります。



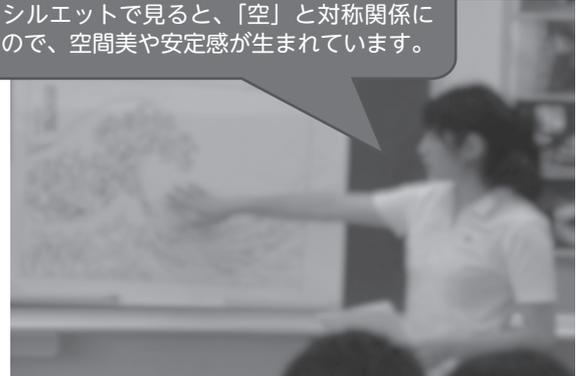
見方や考え方、感じ方を深める「造形の要素の効果」

日本の美術作品として、海外でも人気の葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」には、人を魅了する何かが秘められています。そこで、北斎の構図の工夫を読み解かせることで、表現意図



に迫らせます。すると、生徒は自分なりに感じ取った作品の美しさやよさを述べることができます。

画面中央の「富士山」を中心点にして「波」の形をシルエットで見ると、「空」と対称関係にあるので、空間美や安定感が生まれています。



見方や考え方、感じ方を支える「内発的動機付け」

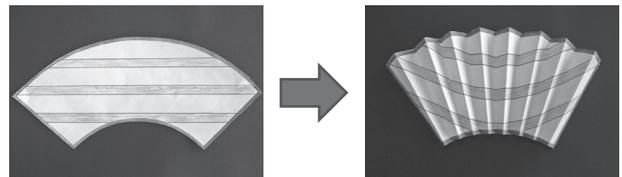
日本特有の表現形式に扇子があります。

扇子を開いた瞬間、描かれているものに雅さや「用の美」を感じます。

しかし、イマドキの生徒に、その魅力や日本の美しさを表現したくなるようにするためには手だて（内発的動機付け）が必要です。

“驚き”や“楽しさ”に、気付かせたことから始めた授業の実践を紹介します。

「扇面に、水平方向に引いた直線は、扇子状に折り曲げるとどのように見えますか？」



扇子状に折り曲げると見え方が変わるぞ！折り目の凹凸が逆なら見え方が変わるのかな？

末広りの構図にするため、レイアウトを工夫しよう！



扇面の下絵を扇子状に・・・



扇面の下絵と扇子状に折り曲げた下絵とを、末広りの構図を観点に対比する。次に、表現の仕方を選択してトリミングしたり、レイアウトしたり試行しながら、下絵の意匠として修正していく。



美術 重点方針

「美術を通して、豊かな生き方やコミュニケーションができる生徒の育成」

○ 形や色彩など造形的な美しさを表現したり、鑑賞したりする授業を通して、お互いの見方や感じ方を深める生徒を育てる。

美術 <上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研>

11月12日(火) 研究会開催

研究主題：豊かな生き方を目指す美術授業

単元名：「2年：水墨画」

会場校：柏崎市立東中学校

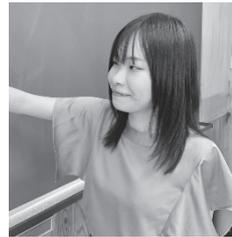
公開：2年2組

授業者：菅原 由真

指導者：上越市立柿崎中学校 校長 大塚 啓 様



研究推進責任者
柏崎市立第二中学校
阿部 昭比古



教科・領域担当者
柏崎市立東中学校
菅原 由真

こんな深い学びの姿を目指します

「美術を通して、コミュニケーションができ、豊かな生き方ができる生徒の育成」を軸とし、次の2つの姿を目指します。

- ① 仲間の作品や参考作品などの様々な作品からよさや美しさを感じ取り、表現の多様性を認め合う姿
- ② 表現と鑑賞の往還を通して、考えをまとめ、自らの思いを確かにしていく姿

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1 (「深い学びの技法」のNo.4)

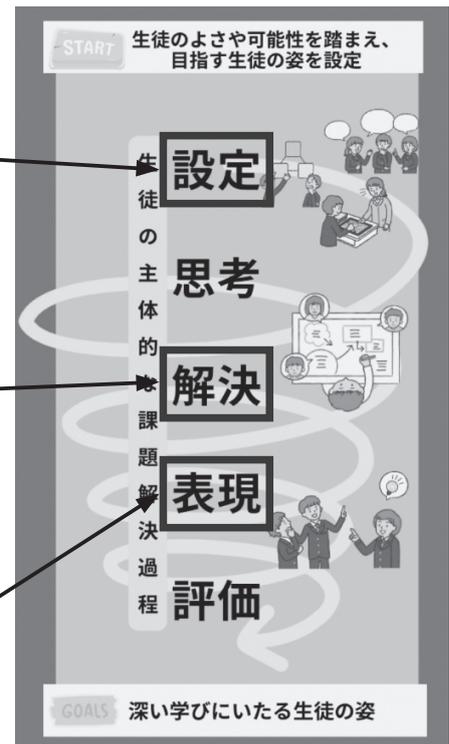
「みる」行為をより身近にするために表現との往還の場を複数設定する。

ポイント2 (「深い学びの技法」のNo.10)

多様性を認め合うことで共感力を養う。他を受け入れる雰囲気づくりを目指す。

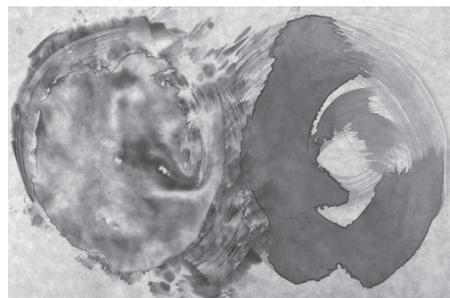
ポイント3 (「深い学びの技法」のNo.15)

自他の作品について理解を深めることで構想を引き出し、豊かな表現に繋げていく。



単元(題材)の様子

- ① 水墨による様々な表現効果を自ら発見するための技法体験活動を行います。描画材として、墨だけでなく白抜き剤等を使うことで表現の幅を広げます。題材の冒頭ではあえて既存の作品は提示せず、ほぼゼロの状態から表現効果の奥深さを発見し、感動に換えていけるよう授業を展開します。



- ② 発見した偶然の効果をiPadで撮影し、表現を引き出した過程を含めてオクリンクを利用して共有します。これにより、「みる」行為によって他の表現からそのまま刺激を受けるだけでなく、自身の表現との融合をも期待でき、次時以降の表現の幅の拡大が期待できます。

ポイント1

ポイント2

- ③ まとめでは、仲間の表現をみて気づいたことをワークシートに自分の言葉でまとめます。そして、自身が生み出した表現効果とともにどのように作品に取り入れ、生かしていくかをイメージし言葉に残します。「イメージ→言葉→イメージ」を繰り返すことでイメージの具現化を目指します。これらが、本時の活動によって生まれた思いやわくわく感を次時の表現活動に結び付ける手立てとなるよう、また、自己の表現をより深めるためのきっかけとなるよう、まとめの展開を目指します。

ポイント3

研究会

- ④ 表現「水墨画」を題材とした実践に取り組みたいと考え、研究を進めてきました。推進委員により協議・実践・参観を重ねた結果、生徒の表現意欲と表現や見方に関わる自己肯定感を高めるために、表現と鑑賞の行き来(往還)を学びの中に設定することを基本に授業を組み立てることとしました。



1年次に行った鑑賞に特化したプレ授業

をもとに、「表現と鑑賞の往還」を学びの中にどのように設定していったらよいのか議論を深めてきました。その結果、既存の表現にとらわれることなく、自ら水墨の表現の可能性に気づくことをスタートラインとし、水墨の世界を深めることで自己表現へと発展させていく流れに行きつきました。

研究会当日は、偶然の効果も含めた水墨の多様な表現効果を発見し、驚き、共有することを目的とした技法体験のための授業を行います。自己の表現を深めるための重要な橋渡しの1時間となるような授業展開を目指します。

ポイント1・2・3

美術 <新潟地区／新潟市中教研>

11月7日(木) 研究会開催

研究主題：豊かな感性を養い、主体的に創造活動を楽しむ
生徒の育成 ～往還でひらめく深化した学び～

単元名：「3年：つぶやきのピクトグラム」

～身の回りのあるあるをわかりやすく伝える～

会場校：新潟市立新津第一中学校

公開：3学年

授業者：青木 智

指導者：新潟市立総合教育センター 指導主事 堀田 雄大 様



研究推進責任者
新潟市立東石山中学校
山際 保男



教科・領域担当者
新潟市立新津第一中学校
青木 智

こんな深い学びの姿を目指します

「できるかもしれない」「面白そう」が原動力となって、行きつ戻りつしながら、自分なりの答えにたどり着く授業を目指します。題材について、視点・観点・論点を設定し、自分なりの意味や価値を探りながら主題を設定します。既習事項を活用し、他者との意見交流を経てアイデアを磨き上げ、自分の考えを作品として表現していきます。互いの作品を鑑賞し、良さや感じ方など多様な価値観を受け入れ、自分の見方や考え方を広げていこうとする姿を目指します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.3）

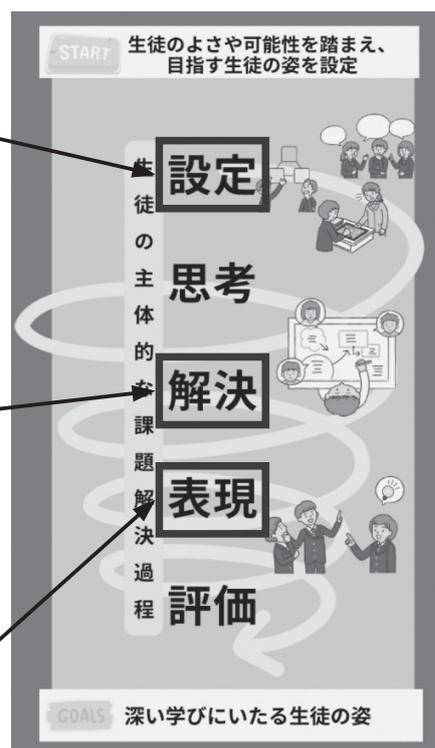
視点・観点・論点を設定して思考や表現をする
ピクトグラムのデザインにかかわる学習を通して視点・観点・論点を整理し、自分なりの主題を設定する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.10）

仲間と練りあいや練り上げをする
グループで協働し、各々のアイデアを検討する。他者から改善へのヒントを得ると同時に、自己の知識や発想を発揮して他者のアイデアを磨き上げる。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.14）

学習モデルを活用して思考や表現をする
ポイント2で学習したことを応用し、自己の作品制作に活用する。



単元(題材)の様子

- ① ピクトグラムのデザインに関する色・形の共通したルールを学習します。デザインの視点・観点・論点を整理することにより、共通認識のもと表現を語ることができるようになります。

ポイント1

- ② 主題となる「わかる人にはわかる」特定少数に向けたアイデアをみんなで考え、共通のアイデアの引き出しを作っていきます。他の生徒が学んだ知識を、発想することが苦手な生徒へ活用することができます。

	種類	意味	色	形
	禁止標識	してはいけない(禁止)	赤	円形に斜線
	警告標識	危険(警告)	黄	正三角形
	指示標識	しなければならない(強制)	青	円形
	安全標識	安全装置と非常口の標示	緑	正方形、長方形
	火気安全(防火)標識	防火	赤	正方形

- ③ 個人で考えたアイデアを、ICTを活用し、4人班で共有ノート上でより面白く伝わるアイデアに構想します。一つの案を協働し、各自の知識やアイデアを発揮してより良いものにする方法を探ります。

これにより、伝えようとするアイデアをさらに伝わるように改善するための色の工夫、形の配置に具体的な見通しがもてるようになります。

ポイント2



- ④ グループ検討での修正案や改善の見直しをもとに、作品の制作をします。完成イメージを明確にもち、主体的に制作に臨むことができます。ペイントアプリを活用することにより、形や色を短時間で躊躇なく検討を重ねることができ、より良いデザインに練り上げることができるようになります。

ポイント3



研究会

ポイント1・2

- ⑤ 研究会では、個人のアイデアを班のメンバーで協力してより良くする構想を考えていく予定です。一人ひとり目指す主題が違うため、デザインにおける共通した色や形の視点や観点をもって検討をしていくことで、各自の知識や経験を発揮し、活発な議論が交わされ、自己のデザインの課題解決の見通しを立てることを目指した授業を行います。



- ⑥ ペイントアプリ「ibis Paint」を活用して作品を制作します。形の配置や変形、色の変更など自在にできるので、描く・塗ることが苦手な生徒にも意欲的に制作に取り組みます。最後に、制作の過程を振り返り、他者の多様な価値観に触れ、自分の見方・感じ方を広げていこうとする姿を目指します。

技術・家庭

生活を工夫し、創造しようとする生徒の育成 ～実体験や関わりを通して深く追究する授業～

技術・家庭は技術分野と家庭分野という2つの異なる免許をもつ教員で指導しているという点で特殊な教科です。主体的・対話的で深い学びについての視点は「主体的な学びとは過去から未来への時間軸の学び、対話的な学びとは現在の空間で学ぶ平面軸での学び、その相互作用で生まれるのが深い学びである。」としています。生活や社会の問題に対して、地域や他との交流を通して実現可能な最適解を探り、生活を改善する実践力を育てます。



県中教研 技術・家庭部 全県部長
南魚沼市立大和中学校

校長 青木 新一

現状の問題点から構想し、プログラミングや構想図・具体物での試行錯誤を通して深い学びを創出する 長岡市・三島郡

高橋先生(宮内中:技術分野)の「3学年:計測・制御のプログラミングの力でより安全・安心なハーブ栽培サポートシステムの開発を目指そう(D:情報の技術)」の実践では「これからの生物育成(B:生物育成の技術)」との統合的な課題を題材とし、取り組んだ。野生動物から作物を守る、環境を整えるプログラムを考えた。音、液晶パネル、モータなど仕事を行う部分の中から選択し、模型を用いて実験を行った。生徒は「野生動物をどうやって検知するか」「野生動物を検知できた場合にどうやって追い払うか」などをさまざまな視点から想像をめぐらして考え、最適解を探った。動物の影響が予測できないものであったことが生徒の問題意識を刺激し想定を知恵を絞って広げ学びを深めた。

長岡市立旭岡中学校の家庭分野の実践では「3学年:幼児とのかかわりの工夫(A:家族・家庭生活)」では時間軸に大きくかかわる「生徒自身の成長」について幼児とのかかわり方について考えた。こども園等の実習体験だけでなく長岡市教育委員会子ども未来部の事業である「次世代の親育成事業」と合わせて取り組んだ。0歳児とその親を学校に招き、育児の話をしてもらったり、幼児を抱っこさせてもらったりする活動を通して、自分自身の時間軸を遡り自分自身も周囲から愛される存在であることを確認した。時間軸の自分の将来についても0歳児の親から学ぶことで未来の自分を投影して考えることができた。生徒1人に幼児1人という環境での保育を行えるという恵まれた環境での実体験は深い学びを創出した。

唯一無二の地域連携を通して、地域と深く関わり、対話を通して、将来への実践につながる深い学びを創出する 佐渡市

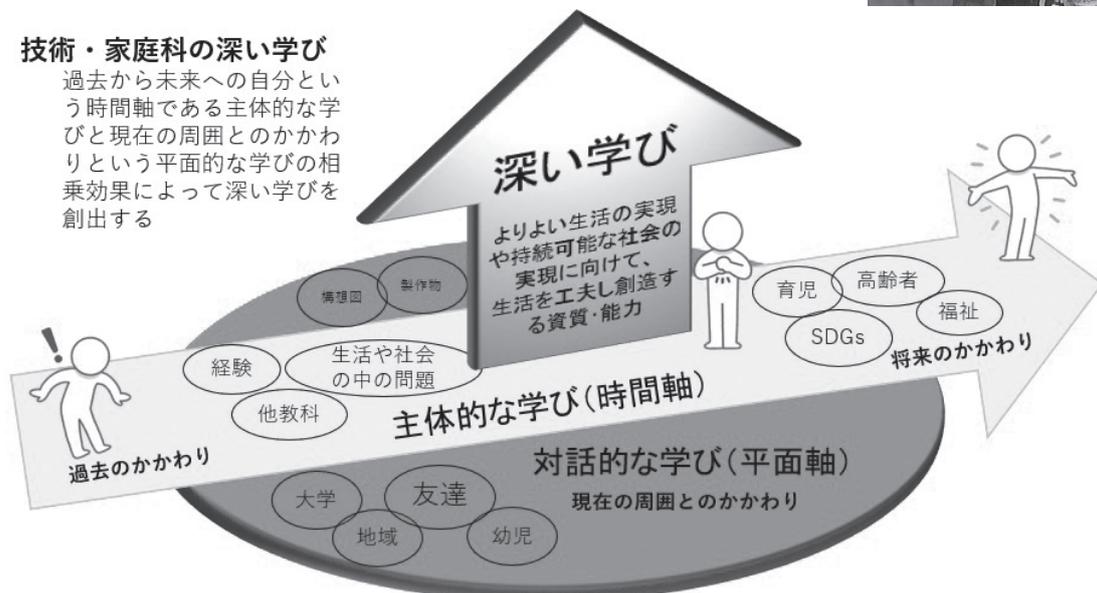
川原先生（新穂中：技術分野）の「1学年：伝統文化から学ぼう（A材料と加工の技術）」の実践では、佐渡市という地域のもつ教育資源に驚かされた。その一つが「伝統文化と環境福祉の専門学校 <https://www.sado-nsg.com/>」である。佐渡に多く残る神社仏閣などの豊富な歴史的建造物を生きた教材として授業に取り入れ本物を実際に修復・再建するという他校では真似のできない学校であり、日本各地から宮大工の修行に学生が集まる。この唯一無二の学校から多いときは20名が授業に入って支援をする。材料と加工の技術で学ばせたい先人の知恵や伝統文化など、技能面だけでなく学ぶ態度も高められる学校・佐渡市・地元企業が三位一体となつての連携の理想型ともいえる実践である。

日本の伝統建築には木材資源などの自然か

ら賜ったものを大切にする思いや技術が引き継がれている。その一つが木材同士の接合である。釘や金物を一切使用せず丈夫でしかも美しい。生徒はその圧倒的な技術に学び仕組みを追究し実際の加工を肌で感じやってみる。そこで学んだことを自分の作品に生かす段階や製作後の振り返りの段階でも学生とのかかわりがベースにある。

佐渡市は昨年度は技術分野2名、家庭分野0名という状況だったとのことである。その状況の中でのこの教育資源を生かした実践は一人でも多くの教員に見てもらいたい実践である。

宮大工を学生に指導している親方から学ぶことは無限。伝統とは何かを実感。



技術・家庭科の深い学び

過去から未来への自分という時間軸である主体的な学びと現在の周囲とのかかわりという平面的な学びの相乗効果によって深い学びを創出する

技術・家庭 重点方針

実践的・体験的な学習活動を通して基礎的・基本的な知識及び技術を身に付けるとともに、学習したことを生かして、よりよい生活、社会を目指そうとする能力と態度の育成に努める。

- 生活実態や社会状況を適切に把握し、学習意欲を高め、生活との関連を重視した指導計画や教材開発に努める。
- 学習結果や技術と家庭や社会との望ましい関係等について、自分の考えを発表したり、話し合ったりする活動場面を設定する。

技術・家庭 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

11月27日(水) 研究会開催

研究主題：持続可能な社会の実現に向けて、生活を工夫し創造する生徒の育成～深い学びにいたる学習指導の工夫～

題材名：「3年：情報の技術」

計測・制御のプログラミングの力で、より安全・安心なハーブ栽培サポートシステムの開発を目指そう！

会場校：長岡市立宮内中学校

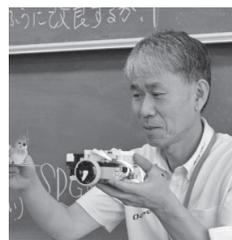
公開：1学級

授業者：高橋 清

指導者：県立教育センター 指導主事 大野 敏法 様



研究推進責任者
長岡市立旭岡中学校
加藤 尚徳



教科・領域担当者
長岡市立宮内中学校
高橋 清

こんな深い学びの姿を目指します

これまで生徒自身が経験した課題を焦点化することによって、生徒は他者とのつながりを意識し、個々の学校や地域における自然環境を含む様々な条件下での実現可能な最適解を探りながら学習に取り組んでいきます。その過程において過去から未来へと続く時間軸の中で、持続可能な社会の実現に向けて、生活を工夫し創造していく姿を目指します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.4）

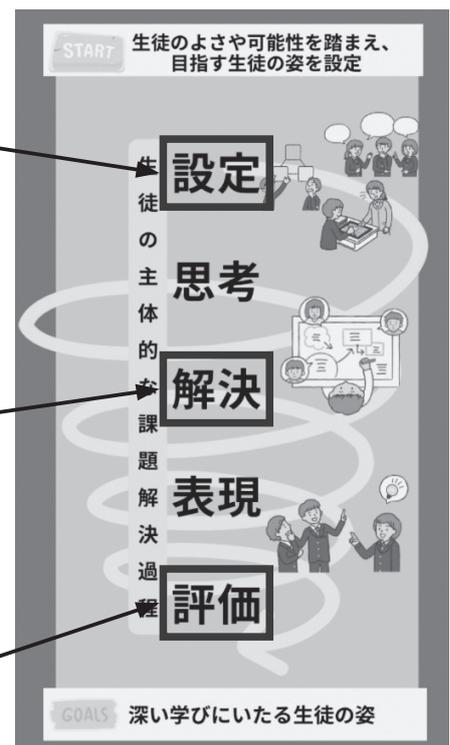
- ④ R-PCDAサイクルを設定して活動や作品を改善する
生活の場面で課題の実態を把握・焦点化し、検証改善サイクルを設定する

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9）

- ⑨ 学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする
課題に対して実現可能なプログラミングや保育実習の場面で幼児とのかかわり方として表現する

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.19）

- ⑲ 学習成果と自己との関わりを振り返る
実習や体験を通して得た知識を、将来の自分事として振り返る



題材の様子

技術分野では、「これからの生物育成」と「計測・制御のプログラミングによる問題解決」の統合的な課題を題材とし、長岡市教育委員会保有のレゴSPIKEプライムを用いて学習します。

家庭分野では、「幼児とのかかわり方の工夫」を題材として実践を行いました。長岡市が進める保育学習と同時期に行うなどカリキュラムマネジメントしました。

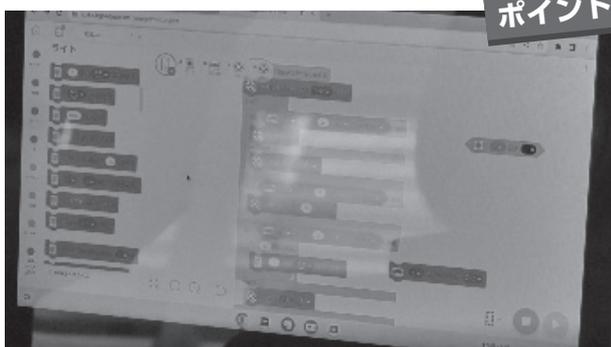
技術分野



ポイント1

① 設定について

昨今、野生動物による作物被害が増え、注意喚起が出されることが多くなりました。そこで生徒は被害を出さない手段として野生動物を寄せつけないプログラム、または、よりよい環境を整えるプログラムを考えます。音・液晶パネル・モータなど仕事を行う部分の中から選択し、模型を用いて実験を行います。しきい値の調整やデバッグを行いながら自分たちのプログラムを完成させます。



ポイント2

② 解決について

長岡市教育委員会が保有するプログラミング教材であることから、市内の全ての中学校で使用可能で実現できる題材です。また、地域によってカラスやカメムシなど被害を及ぼす野生動物が異なる点から、他校での実践を共有し合うことで自校に適した教材や方法を選択することができると考えます。教育研究会当日は、スズメを対象の野生動物として扱い、生物をよりよく育成させる環境のための最適解を見つけ出す授業を行います。

家庭分野



①② 設定・解決について

家庭分野が主体的な学びとして考える時間軸に大きくかかわる「生徒自身の成長」について、幼児とのかかわり方を通して考えました。幼稚園等での実習体験だけでなく、長岡市が進める保育学習と同時期に行いました。0歳児の親子を本校に招き、育児の話や抱っこなどのふれあいを通して実習への興味関心を高め、また、自分自身も周りの方々から愛される存在であることに気づくことができました。

③ 評価について

実習の場面では、幼児一人に対し中学生一人で保育実習を行いました。絵本の読み聞かせやごっこ遊びなどを行い心を通わせ、自分の成長とともに子供が育つ環境としての家族の役割について振り返ることができました。

ポイント3



技術・家庭 <下越地区／佐渡市中教研>

10月25日(金) 研究会開催

研究主題：実践的・体験的な活動を通して、学びを深める生徒の育成

～伝統文化と地域人材の活用～

題材名：「1年：材料と加工の技術」
生活に役立つ製作品を作ろう
～伝統文化から学ぼう～

会場校：佐渡市立新穂中学校

公開：1学級

授業者：川原 幾代子

指導者：佐渡市立内海府中学校 校長 山口 智様



研究推進責任者
佐渡市立金井中学校
霍間 厚浩



教科・領域担当者
佐渡市立新穂中学校
川原 幾代子

こんな深い学びの姿を目指します

生徒の深い学びの実現に向けて、製作学習を通じた地域人材との関わりの中から対話的な学びを推進します。地域人材と関わることによって、既習の知識や技能をフィードバックしながら、スキルアップ、ブラッシュアップをしていくことを目指します。また課題解決的な題材構成により、主体的な学びを推進します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.2）

②知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする。

既習事項を活かして疑問や実証をまとめ、仮説を設定する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.8）

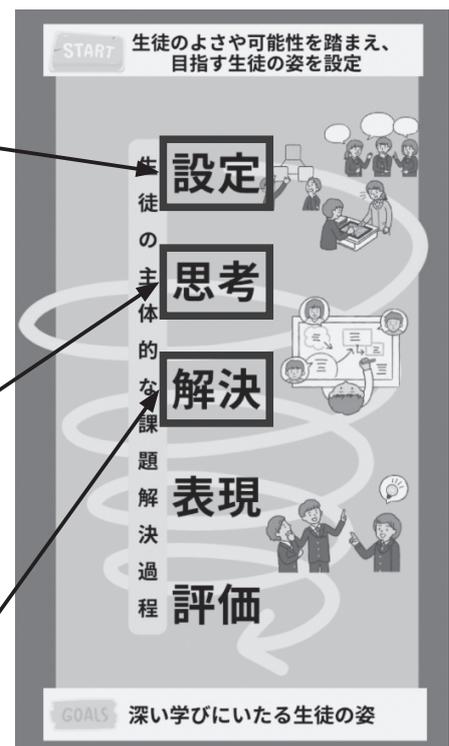
⑧異なる多様な考えを比較して考える。

ゲストティーチャーとの関わりの中で、多様な技術や技能をスキルアップ・ブラッシュアップする。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.9）

⑨学んだ知識や技能を活用して思考や表現をする。

学習で学んだことを、自己の生活に活かすことができる。



題材の様子

佐渡には国内でも唯一、宮大工を中心に学ぶ学科のある専門学校が存在します。宮大工を目指す学生が全国各地から集まるこの学科では、志のある学生たちが伝統文化を継承するべく日々の修行(学習)に取り組んでいます。本題材では、この「SADO伝統文化と環境福祉の専門学校」から伝統建築大工学科の親方と学生をゲストティーチャーに招いた実践を行い、公開します。

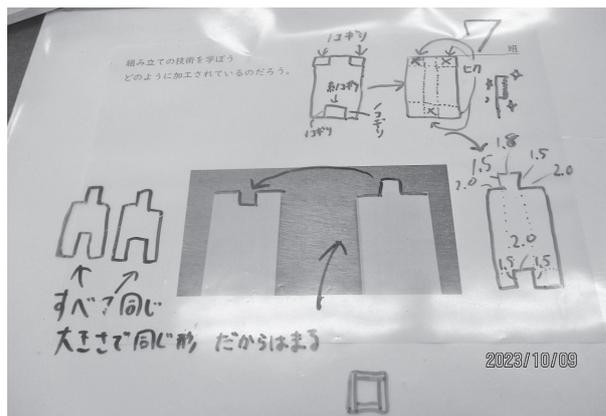


ポイント1

① 設定について

伝統的な接合方法に焦点を当てて課題解決的な学習を行います。

専門学校の先生(親方)の作った作品の接合の方法について疑問をもち、その加工方法を考えます。既習の知識や技能を総動員し、その加工方法を考えます。使う道具や加工部分についてグループで検討し、検証していきます。



ポイント2

② 思考について

親方や学生にグループの考えを発表し、意見やアドバイスをフィードバックしてもらい、製作への意欲を高めていきます。

そして接合の方法を親方や専門学校の学生から直接学びます。この地域人材との積極的な交流と対話的な学びにより、新しい技術や技能の習得を目指します。この交流の中で今までに体験することのなかった伝統的な加工の技術を肌で感じ取ります。知識に偏ったり理屈に拘ったりするような学びではなく、ホンモノの学びを得ることができます。



ポイント3

③ 解決について

ゲストティーチャーから学んだ接合方法を、自分の作品に生かすことができるかどうか、自己の作品を振り返って考察、検討します。

また、自己の作品を他者に評価してもらうことで意欲を向上させたり生活に生かしたりすることができるようになります。



生徒はゲストティーチャーと接して「知らないことがあった」「わかりやすく教えてもらった」「なるほどと思った」「隙間なく加工するのは難しかった」などを学習シートに記述していました。学生も生徒の発想の面白さを把握すると共に、「時間がたりなかった」「伝えるのは難しかった」という感想をいただきました。

特別活動

自己や集団の課題を見いだし、 多様な他者と共に解決できる生徒の育成

VUCAと呼ばれる時代において、受け身ではなく、当事者として多様な他者と人間関係を形成し、積極的に集団に参画し、周りとの関係性を意識しながら自身の生き方を真剣に考え、自己実現を果たす生徒の育成が求められている。異年齢を含めた集団との関わりを通して、課題を見いだし、解決する過程において、未来を力強く切り開く資質・能力を育てていきたい。



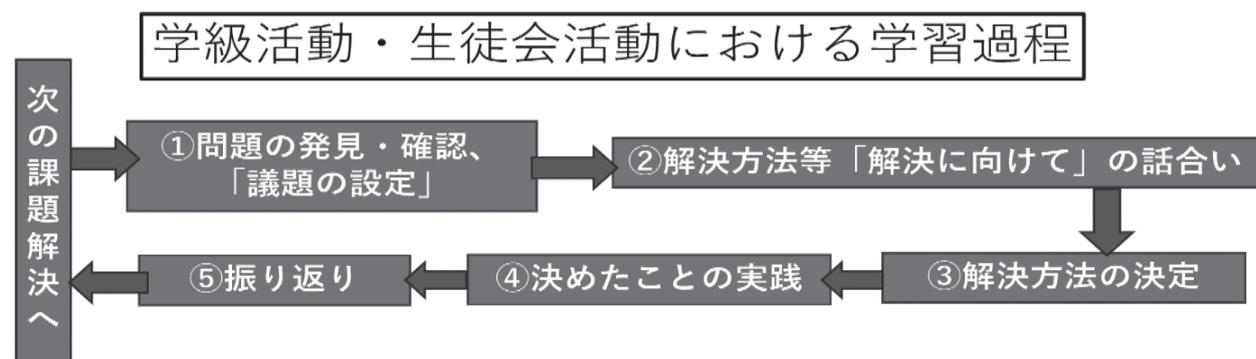
県中教研 特別活動部 全県部長
三條市立第一中学校

校長 田村 和弘

特別活動における学習過程と深い学び

中学校学習指導要領の学級活動の目標には「課題を見いだし、解決するために話し合い」、生徒会活動の目標には「諸問題の解決に向けて・・・(略)・・・自主的・実践的に取り組む」という文言が入っている。この文言は特別活動を通して「多様な他者と協働することの意義の理解」・「合意形成・意思決定する能力」・「自己実現を図ろうとする態度」等の資質・能力を身に付けるには、下の図のように、学習指導要領解説特別活動編（以下：解説）で

示されている「課題（問題）を見いだし、解決する学習過程」を含んだ題材を構成する必要があることを示している。生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方（自己・集団・社会の問題を捉え、人間関係形成・社会参画・自己実現に結びつける）を働かせ、この学習過程を1つのサイクルで終わらせることなく、継続させることで、深い学びを実現する。



中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編を基に作成 ※「 」は生徒会活動

異学年交流を通した学びの広がり・深まりと自己肯定感の醸成

解説の第4章第2節4では「異年齢集団の交流は、他者の役に立つ喜びを体得、自己肯定感の醸成に寄与する」と異年齢集団の交流の効果を述べている。下学年との交流の際は、上学年がリードする立場になるので、自己肯定感を得やすい。また、交流の対象が上学年になると、自分たちが経験や学習していないことを基に話が展開され、学びが広がったり、深まったりする可能性が高くなる。

生徒会活動を中心とした実践においては、小学6年生の関するアドバイスをを行う。アドバイスを受けて小学生の表情が和らいだり、

参考になったとのコメントがあったりすれば、中学生の自己肯定感が高まる。また、小学生の不安が中学生のよりよい学校づくりのヒントを与えることになり、解決に向けての話合いの活性化につながり、学びを促進する効果が期待できる。

学級活動(3)を中心とした実践においては、中学2年生が3年生からアドバイスを受けたり、意見交換をしたりすることから、今後の中学校生活の充実や進路選択等に関する考え方が広がったり、深まったりする効果が期待できる。

キャリア教育の要としての特別活動

中学校学習指導要領(平成29年告示)の総則第4の1(3)で「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と記述され、特別活動はキャリア教育の要として位置づけられている(右下図は筆者のイメージ)。学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」はキャリア教育の具体的実践の場として重要な位置を占めると考えられる。

学級活動(3)を中心とした実践においては「道徳」で自分らしい生き方を模索する作者の姿と自己との「対話」を通して、また「英語」では憧れる人物や夢に関する表現を「他者から評価」してもらうことを通して、自身の課題を捉え、今後の生き方につなげる。

生徒会活動を中心とした実践においては、小学生との交流を通して味わうことのできた自己肯定感や中学生のキャリア発達課題である「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」につながる。

これらの題材での学んだことを一過性のものでせず、振り返りを記録したものを「キャリア・パスポート」等ポートフォリオとして保管し、自己評価や他者評価(教師との面談等)の場面で活用し、生徒のキャリア発達につなげることがキャリア教育の要としての特別活動の役割を果たすことにつながる。



キャリア教育と特別活動の関係

特別活動 重点方針

「学級活動、生徒会活動及び学校行事」の相互の関連を見通した指導計画を作成し、集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる場面を意図的、計画的に設定し、主体的・対話的で深い学びの実現を通して、次の能力・態度を育成する。

- 多様な他者と協働する集団活動の意義を理解し、意義に基づいた行動を取ることができる能力
- 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができる能力
- 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活や人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度

特別活動 <中越地区／小千谷市中教研>

11月21日(木) 研究会開催

研究主題：夢や希望をもち、なりたい自分を実現しよう
とする生徒の育成
～特別活動を要とするキャリア教育の視点から～

単元名：「2年：理想の3年生になるために」

会場校：小千谷市立南中学校

公開：1学級

授業者：中川 芳隆

指導者：上越教育大学大学院 教授 山田 智之 様



研究推進責任者
小千谷市立南中学校
近藤 尚子



教科・領域担当者
小千谷市立南中学校
中川 芳隆

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が自分の考えをもち、他者と交流しながら、さらに自分の考えを広げ、新たな気づきや違った視点を自分の未来に生かそうとする姿を目指します。教育活動全体でキャリア教育を展開する中で、生徒は自己実現につながる多くの気づきをしています。特別活動（学級活動（3））でその気づきをつなげて意識化させます。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1）

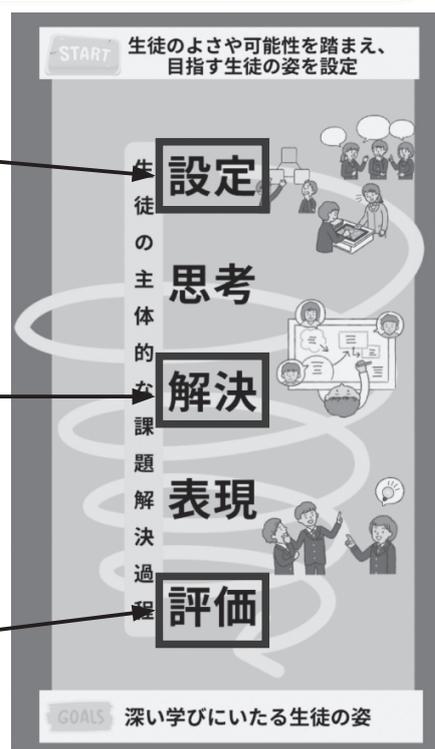
各教科等での学びを振り返り、将来の自分発見につながる課題を設定する。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.8）

異なる考えを参考にしながら、根拠を明確にし、自分の考えを再形成する。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.20）

授業で学んだことから、自分に取り組む課題を設定し、次の学びへつなげる。



単元(題材)の様子

① 道徳「私は14歳」では、自分らしい生き方を模索する作者の姿から、自分自身と対話を重ねていきます。

これまでの自分を振り返り、自分の良さを生かし伸ばすための課題設定につなげます。

ポイント1



② 英語では、憧れる人物や夢についてスピーチをします。自分が作成した原稿をグループで再考して発表につなげます。これにより、内容や構成、表現の工夫に気付き、英文の精度を上げることが期待できます。

発表では、互いに評価し合い、自分の目標が達成されたかを振り返ります。他者から認められたことや改善点に気付き、次のプロジェクトへの目標や課題を設定することができます。

ポイント2・3



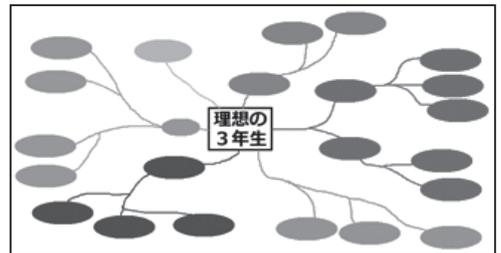
③ 学級活動では、生徒会選挙を控え、自分たちが学校を率いる立場になることを確認し合います。生徒会活動の仕組みや役職を確認し、それぞれの立場でリーダーとして活躍するための意識の醸成を図ります。

研究会

④⑤⑥ 学級活動では、自分とは違う意識や視点をもって臨んできた3年生の声を直に聞くことで、学校のリーダーに必要な見方や考え方に気付き、心構えをもつ準備につなげます。マインドマップを作成し、可視化することで、考えを整理し、確認し合います。作成したマインドマップを振り返り、自分が大切にしたいことを比較し合い、考えを深めます。

目標達成のための要素を練り合う活動が、将来の自分の姿を想像し、その姿に向けて必要な短期目標設定の動機付けにもなります。

ポイント2・3



要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8
要素1	要素2	要素3	要素4	要素5	要素6	要素7	要素8

⑦ 学級活動において、各自の短期目標実践を振り返って自己評価します。それを生かした新たな課題を設定します。

ポイント3

特別活動 <下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研>

10月30日(水) 研究会開催

研究主題：他者を認め、望ましい人間関係を築いていく
活動の工夫

～自ら課題を見つけ、共有して課題解決を目指す生徒の育成～

単 元 名：「3年：なかよし子どもサミット」

会 場 校：阿賀野市立水原中学校

公 開：3学年

授 業 者：前田 健太郎

指 導 者：村上市立村上南小学校 校長 磯部 睦 様



研究推進責任者
阿賀野市立京ヶ瀬中学校
松川 香奈恵



教科・領域担当者
阿賀野市立水原中学校
前田 健太郎

こんな深い学びの姿を目指します

望ましい人間関係を基盤とし、多様な考え方を受容し、認め合いながら、自身の考えを伝えたり、広げたり、深めたりして、お互いが折り合いをつけた納得解を導き出す姿を目指します。小中での交流活動を通して、安心できる雰囲気をつくり、小中それぞれが抱える課題を、一緒に考える活動を行い、集団としての学びを深めます。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.8）

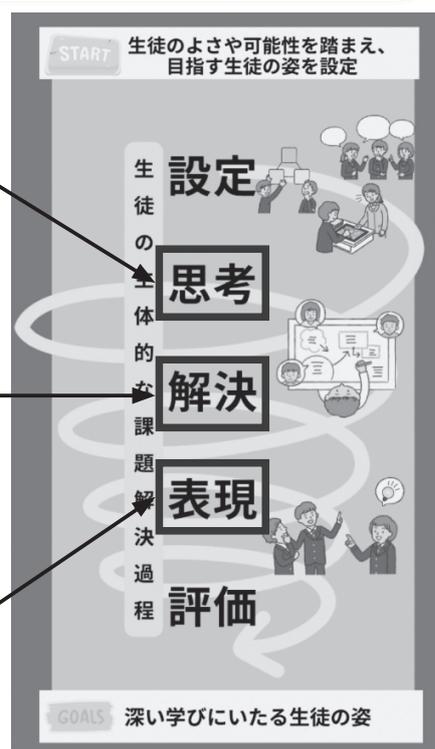
小グループで交流活動を行い、異なる考えに触れる機会を設定する

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.10）

課題を見だし、話し合いを通して、さまざまな立場から課題解決について考える。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.15）

活動を振り返り、学んだことや感じたことを自分の言葉でまとめたり、伝えたりする。



単元(題材)の様子

① 生活アンケートから、学校の課題を見いだします。学年、学級、自分自身の生活など、さまざまな場面を振り返ることで、課題解決の意欲が高まります。

小学校でも同様にアンケートを実施し、解決する課題を明らかにします。

ポイント2

② 課題を一つに選定し、学級内で課題解決のための話し合い活動を行います。

また、「なかよし子どもサミット」を行うことを確認し、話し合いのルールを確認します。

中学入学当時の悩みや気持ちを想起させることで、自身の経験をもとに小学生の気持ちに共感しながら、話し合いを進めることができるようにします。

ポイント2



研究会

③ 研究会では、小中連携事業「なかよし子どもサミット」として、中学校区3校の小学6年生と中学3年生が、話し合い活動を行います。多様な考えに触れることができるよう、異校種のグループをつくり、学校生活での課題を解決するための方策について考えます。

交流活動を通し、小学生と中学生が互いに安心して関わるができるようにします。

中学生が自分の経験をもとに小学生の悩みに共感しながら一緒に考えたり、中学校の課題について、小学生の意見を取り入れながら考えたりする過程で、互いに折り合いをつけながら学びを深めていく姿を目指します。



ポイント1・2・3

④⑤ 生徒会の活動として、「なかよし子どもサミット」で確認した課題の方策を整理します。

その後行われる「いじめ見逃しゼロスクール集会」では、全校生徒で課題解決の追加の方策を考えます。話し合いの中で示された様々なアイデアを織り込むよう意識することで、多様な意見に耳を傾け、集団で合意形成したことを日々の生活につなげ、実践していきます。



ポイント2・3

総合的な学習の時間

実生活や地域の中から自ら課題を見出し、 その解決のための方策を探る

予測が難しく、変化の激しい現代社会において、探究的な見方や考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、さらには自己の生き方を考えていく。また、そのための資質・能力を育むことを目標とした総合的な学習の時間。

今回は地域活性化に向けた取組を通して、自分の将来と地域の在り方について考える実践を進めてきました。



県中教研 総合的な学習の時間部 全県部長
新潟市立岩室中学校

校長 小塚 忠昭

総合的な学習の時間で育みたい資質・能力について考える

総合的な学習の時間の目標は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指すものであると示されています。また、目標や内容については各学校で定めるとしており、各学校では、地域の特性や生徒の実態、学校の教育方針などに基づき、目標や内容の他、育みたい資質・能力の育成方針を定めていきます。

そして、育成したい資質・能力を具体化するため、総合的な学習の時間で様々な教育活動を組織していきます。そこではプロジェク

ト型学習（PBL）やフィールドワーク、地域連携活動といった学習などが考えられます。

また、生徒自身がこれらの学習を通してどのような力が付いたかを認識することで、自己肯定感や自己有用感の高まりにもつながります。時には地域の方々からの評価も有効です。

これらが効果的に作用することで、生徒はどのようにしたら社会や自分の人生をよりよいものにしていけるかを考え、自分の可能性の広がりにも気付くことができるものと考えます。

【探究のプロセス】～このプロセスを繰り返すことが大切～

【課題の設定】

課題を設定し、課題意識をもつ

【情報の収集】

必要な情報を取り出し
たり収集したりする。

【整理・分析】

収集した情報を、整
理・分析し思考する。

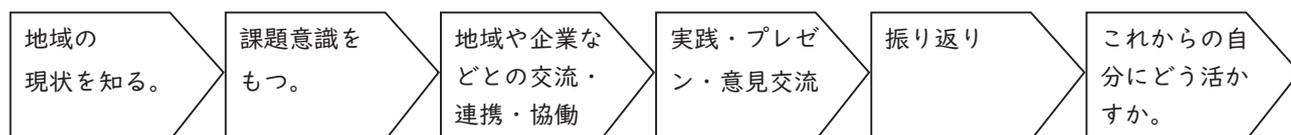
【まとめ・表現】

気付きや発見、自分
の考えをまとめ、判
断、表現する。

深い学びにいたる学習課題設定と、自分事にするための地域社会との連携における工夫

新潟柳都中学校の実践では、アントレプレナーシップ教育の考えを取り入れた実践が行われます。この教育の理念に含まれる様々な要素を取り入れながら、新潟市内の「しもまち」地区の活性化について考えます。生徒は地域の声や行政の取組など生の声を聞くことでより現実的な課題意識をもつことができ、それらを基に、自分たちが考えた活性化案をプレゼンします。それを聞いた地域の方々や行政、起業家との意見交流の中からさらに考えを深めていきます。

三和中学校の実践では地元（三和区）の企業団体と連携して、地域活性に向けたイベントを企画、実践し、将来の地域の在り方についても考えます。人口減少が進む地域の中で自分たちができることは何かを考え、他者との協働から解決策を練り上げる。さらには1回のイベントで終わらず、どうしたら継続できるか、広く発信できるかも考えます。この学習を通して、地域の未来だけでなく、これからの自己の生き方についても考えるきっかけとなるはずです。



学校全体で取り組みたい体制整備・地域連携に向けて

生徒の主体的な学びを促進していくためには、各中学校において、継続的に総合的な学習を進め、学校全体で一貫性をもった取組を行う必要があります。

校内で限られた担当者のみが計画、運営をしているのはこれらのことが難しくなります。また、生徒の活動が多岐に渡るため、アドバイスする職員にも高いスキルや知識が求められるケースも出てきます。これらの点から、学年部または学校全体で総合的な学習を計画・運営していく体制整備が求められます。

今年度の実践のように、地域との連携が求められる活動では、地域教育コーディネーターや学校運営協議会（CS）の協力も不可欠となってきます。地域社会との協力関係構築は、学習の持続性から見ても有効だと考えます。

また、生徒の活動が地域社会や地元企業へ還元されることで今後の連携も一層強化されていくと思います。

【総合的な学習を継続的に進めていくために大切にしたいこと】

- ① 学校全体で育みたい資質・能力について検討と共有
- ② 学校全体で年間計画の策定と共有
- ③ 学校全体での支援体制の構築（職員研修も含む）
- ④ 地域社会・外部機関との連携構築
- ⑤ 成果の発信と共有・地域への還元（地域や外部への発信も含む）
- ⑥ 継続的な振り返りと評価

総合的な学習の時間 重点方針

学習過程と評価を中核に、主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導を推進する。

- 学習過程において、「課題設定」を工夫し、「協働的な学習」と「言語活動」を適切に位置付けることを通して、探究的な学習の充実を図る。
- 「育てようとする資質や能力及び態度」の視点に配慮した評価の観点を定め、それに基づいて生徒の具体的な学習状況を想定した評価規準を設定し、学習評価の充実を図る。

総合的な学習の時間

<上越地区 / 上越市中教研>

11月28日(木) 研究会開催

研究主題：ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える生徒の育成
単元名：「3年：三和区地域活性化プロジェクト」
～もうすぐで上沼道三和IC開通！わくわく三和区！～

会場校：上越市立三和中学校

公開：3学年

授業者：山川 純

指導者：上越教育大学 特任教授 釜田 聡 様
妙高市立妙高中学校 教頭 関原 和人 様



研究推進責任者
上越市立頸城中学校
中澤 優子



教科・領域担当者
上越市立三和中学校
山川 純

こんな深い学びの姿を目指します

三和区の10企業団体と連携し、三和区を活性化する活動を通して、「ふるさとへの愛と誇りを胸に、自分の将来と今後の地域の在り方について考える姿」を目指します。「探究し知る学び（探究サイクル）」と「発想し創る学び（デザイン思考サイクル）」の2つのサイクルを往還させ、地域のヒト・コト・モノをつなぐことで、「地域共生力」「創造的問題解決力」「協働性」の3つの資質・能力を高め、ふるさと三和を愛する子どもを育成します。

主な手立て（「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連）

ポイント1（「深い学びの技法」のNo.1・4）

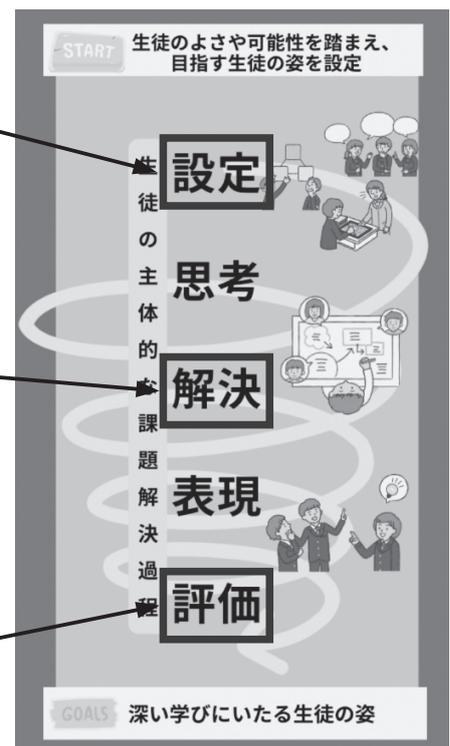
地域活性化に取り組んでいる企業へのインタビューを通して、その思いや実態から生徒が課題を設定し、課題解決に向けて計画を立てる。

ポイント2（「深い学びの技法」のNo.9・10）

課題解決に向けて、ICTを活用して情報を収集し、仲間と協働してアイデアを考案する。そして、企業と「創造」「検証」しながら新商品・新企画を練り上げる。

ポイント3（「深い学びの技法」のNo.18・19）

OPPシートを用いて、活性化プロジェクトで「どのような力が身に付いたか」「探究学習で学んだことは何か」という視点でこれまでの学習の成果を振り返る。

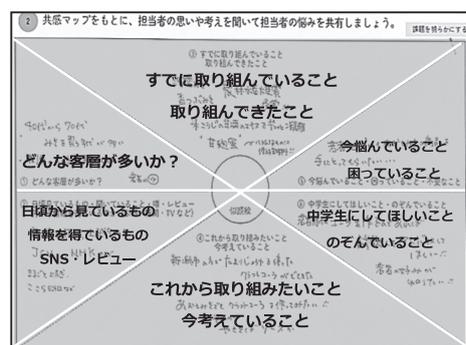
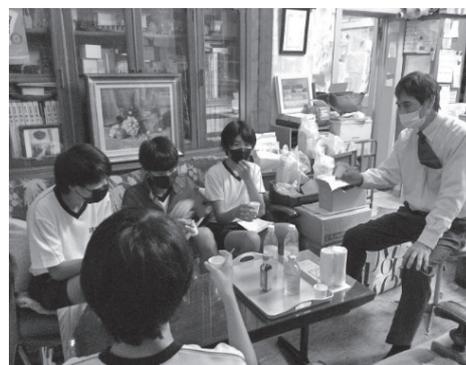


単元(題材)の様子

ポイント1

三和区総合事務所から三和区活性化プロジェクトの依頼を受け、デザイン思考をもとに課題を設定し、解決までの計画を仲間と協働して考える。【共感・理解】

単元ガイダンスでは、三和区総合事務所長と共に、三和区の魅力と課題について考えました。所長の話から、人口減少による三和区の衰退を防ぐためには、地域共生力(地域のヒト・コト・モノを活かして地域と共存する力)が求められていることがわかりました。そして、「区の活性化に向けて三和区の10企業団体と連携し、新商品や新企画を考えてほしい」という依頼を受けました。生徒は、各企業へ訪問した際に、共感マップ(右図)を用いてインタビューを行い、デザイン思考サイクルのもと、課題を設定しました。あおき味噌株式会社チームでは、「客層は年配の方が多く、若者に商品を手にとってもらえない。若者にも手にとってもらえるような商品を作るには、どうすればいいのか?当社の発酵食品で若者向けの商品を開発したい」というインタビュー内容から、「甘麹蜜を原料としたクラフトコーラはどうしたら若者向けの味になるのか?」という課題を設定しました。課題解決に向けて、全国のクラフトコーラの使用原材料を調べることで計画を立てていきました。



ポイント2

ICTを活用して情報を収集し、試飲・試食を通して新商品を創造する。祭りでの販売を通してさらに商品内容を練り上げる。【課題設定→創造→検証→振り返り】



ICTを活用し、クローブ、カルダモンなどの香辛料や甘味料について調べました。「若者に健康的な商品を」という社長のコンセプトのもと、香辛料や甘味料の組み合わせを変えて試飲を繰り返しました。あおき味噌の「甘麹蜜」とカルダモンを使用し、若者向けで健康的な甘さを出すことに成功しました。さんわ祭りで多くの人から飲んでもらい、アンケート結果から課題を再設定しました。

ポイント3



生徒作成
ロゴマーク

OPPシートによる学習成果の可視化とメタ認知

これまでの探究学習の履歴(小单元ごとの振り返り)を1枚のシートにまとめることで学習の成果を可視化し、どのような力が身に付いたのかをメタ認知できるようにしています。

研究会

「深い学びの姿」を実現

総合事務所長、地域協議会、地域コーディネーターと共にこれまでの学習の成果を振り返ります。そして、自分の将来と今後の三和区の在り方について考えたり、これから三和区にどのように貢献していくのかについて議論したりする予定です。

総合的な学習の時間

＜新潟地区／新潟市中教研＞

10月4日(金) 研究会開催

研究主題：問題解決や探究活動に、主体的、創造的、協働的で深い学びにいたる授業を通して、自己の生き方を高める生徒の育成

単元名：「3年：しもまちプロポジション」
～しもまちの活性化を地域住民とともに創出しよう～

会場校：新潟市立新潟柳都中学校

公開：3学年2学級

授業者：長部 賢・野田 真里奈・関 奈緒・大野 綾子

指導者：新潟大学経済学部 准教授 伊藤 龍史 様

新潟市教育委員会学校支援課

副参事 齋藤 まゆみ 様



研究推進責任者
新潟市立東新潟中学校
吉田 新



教科・領域担当者
新潟市立新潟柳都中学校
井上 美恵

こんな深い学びの姿を目指します

「しもまち」の活性化を願う地域や行政の想いや取組を受け、情報収集、調査、専門的立場の方に聞くなどして、地域の一員として主体的に活性化案を考え、聞く側に共感させるプレゼンができるよう工夫します。

そして、実際に、地域や行政に活性化案を説明し、さらにより提案になるよう、生の声を聞きながら自分たちの想いと地域の想いをフィットさせ、ともに創出していきます。アントレプレナーシップ教育の視点を取り入れた学習活動を通して、生徒が地域愛だけでなく、主体性、協働性、創造性や課題解決のための方法を身に付け、これからの社会で発揮していこうとする姿を目指します。

主な手立て(「深い学びの20の技法」「生徒の主体的な課題解決過程」との関連)

ポイント1(「深い学びの技法」のNo.1)

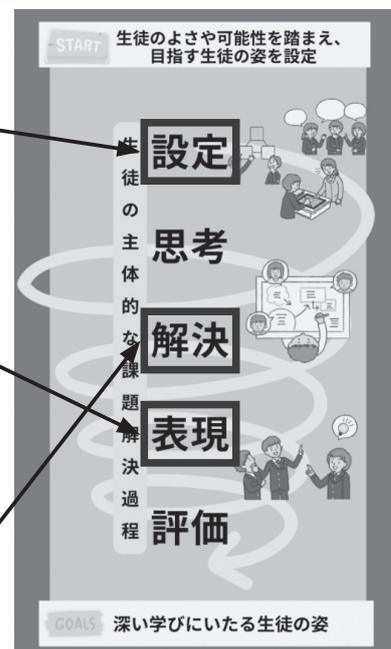
ギャップからの課題意識と、目標を共有する仲間探しで主体性をアップ↑

ポイント2(「深い学びの技法」のNo.13)

“相手を共感させるプレゼン(ピッチ)”で、実現・協働への挑戦!

ポイント3(「深い学びの技法」のNo.10)

生徒の活性化案を地域住民とともにお互いの想いをフィットさせて創出!



単元(題材)の様子

しもまち地域の課題を自分たちなりに考える。現状と課題を聞くことで、自分たちが思っている以上に深刻であることに気づき、改めて地域の課題を再考する。

しもまち地域の活性化に向けて、自分がしたいことを思い描き、共に行動を起こしていく仲間を見つけ、主体的に学習に取り組んでいく。

主体性

ポイント1



地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方をお招きして、自分たちが考えた活性化案を提案する。アントレプレナーシップ教育のキーの1つは、“相手を共感させるプレゼン(ピッチ)”。短い時間で、どれだけ相手を惹き付け、実現に向かえるか、協働者を作れるか。このチャンスをプレゼン(ピッチ)で挑戦し、つかむ。提示、順番、見せ方、声の出し方等も工夫し、論理的に魅力的なプレゼン(ピッチ)ができるようにする。

実現・協働への挑戦

ポイント2

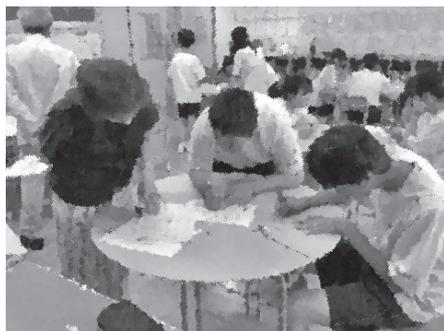
地域の方、行政の方、活性化に実際に取り組んでいる方、起業家の方にグループに入って頂き、活性化案のプレゼン(ピッチ)を聞いてもらい、ともによりよい案に練り上げていく。自分たちの想いだけでなく、相手の想い、願い、ニーズともフィット(合致)させて、実現できるようにしていくことが必要である。よりよいものを創っていこう(主体性)、周りの人とともに創っていこう(協働性)、地域のために実現させたい(貢献)などの気持ちや、意見を建設的に交わすことの重要性(創造性)という気づき生まれる。

主体性・協働性・創造性

ポイント3



研究会



本時では、次のことを手立てとしてポイント2・3を目指します。① ゲストとして、生徒とともに地域を考えていきたいと考えている地域住民を選定、② 活性化案のジャンルが異なる生徒のグループでの練り上げ活動、③ 活性化案を練り上げるための観点・視点の明確化、④ 円滑に、また、今後に生かすことができる練り上げる活動のためのマニュアルと記録。

単元を通して、生徒たちが地域の「ありがとうクリエイター」になる過程の一部を授業公開します。

*起業家を「ありがとうクリエイター」と指導者の伊藤准教授は表現しています。

ポイント2・3

2

指定研究（1年次）の 研究推進委員会の進捗状況



今年度、指定研究がスタートした研究推進委員会
について、進捗状況をお知らせします。

社会
音楽

理科
保健体育

英語
学校保健

社会

単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくりを目指します！

生徒の実態を踏まえ、学習内容を構造化し、生徒の問題意識の変化を想定しながら単元を構想し、学習をデザインしていきます。その際に、深い学びの技法を手立てとして、学びの質の向上を図ります。



全県部長
魚沼市立広神中学校
校長 小森 一秀

▶上越地区

深い学びにいたる授業を目指して！！



柏崎市・刈羽郡中教研
柏崎市立東中学校

新保 隆之

第 1 回研究推進委員会で、目指す深い学びの姿を共有しました。「学び合い」を「深い学び」につなげるための手立てや働きかけを探りながら、研究を進めていきます。

第 1 回研究推進委員会の様子



▶新潟地区

「深い学びの技法」を共有！



新潟市中教研
新潟市立葛塚中学校

木村 伸

単元を通したねらいを達成するために、「深い学びの技法」を活用し、社会的見方・考え方を深めていくかを、模擬授業などを通して明確にしています。

研究推進委員会の様子



▶中越地区

教師の「問い」で「深い学び」へ！

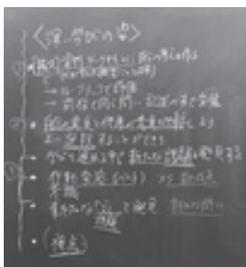


長岡市・三島郡中教研
長岡市立東中学校

山田 圭祐

中越地区では、①教師が「構造的な問い」を準備すること、②生徒に「価値判断」「意思決定」の場面設定をすることで、「深い学び」へつながるような授業を構想しています。

第 2 回研究推進委員会の様子



▶下越地区

深い学びに迫る手立てとは！？



五泉市・東蒲原郡中教研
五泉市立五泉中学校

高橋 保嗣

推進委員会で深い学びに迫るための手立ては何かという事を共有しました。その中で「自分ごと」「言語活動の充実」「深める問い」を 3 本柱に掲げ、研究を進めていくことになりました。

研究推進委員会の様子



理科

「ああ、そういうことか」、 「私、間違っって覚えてたな あ」と、学び直しができる 授業

生徒がどんな姿を見せれば深い学びが成立していると言ってよいのでしょうか。それを教師が明確にイメージし、そのための手立てを理科部で議論する、そんな部会になるといいですね。



全県部長
五泉市立五泉中学校
校長 大川 正史

▶上越地区

課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成



上越市中教研
上越市立城西中学校
中野 祐輔

深い学びをテーマに、目指す生徒の姿を検討しました。生徒が、自己の学びを振り返りながら学びをつなぎ、科学的に探究できる授業を目指します。

第 1 回 研究推進委員会の様子



▶新潟地区

探究学習による深い学びの促進



新潟市中教研
新潟市立宮浦中学校
間 英法

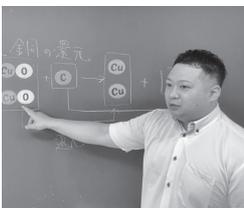
理科は従来から探究的に授業を進めてきました。論を立て、検証実験を行い、考察・振り返りを行う。スパイラルに繰り返すことで深い学びにつなげます。

第 2 回 研究推進委員会にて



▶中越地区

知識や考えを磨く「練り合い」を！



南魚沼市・南魚沼郡中教研
南魚沼市立塩沢中学校
高橋 悠太

他者との対話を通して、学習した知識や考え、表現等を磨く「練り合い」の過程がある深い学びを目指します。単元を通してモデルや振り返りシートを活用します。

秋に郡市内 5 校での授業公開を予定しています。



▶下越地区

表現活動を通して深い学びへ



村上市・岩船郡中教研
村上市立村上東中学校
佐藤 隆洋

深い学びの技法を用いた研究授業を 7 月に行いました。今後は、事象を 4 コマの形で表現する活動を通して理科における深い学びに至る授業を目指します。

11 月に関川中学校で授業公開予定。



6月の研究推進委員会の様子

英語

本当の意味で、英語でコミュニケーションができる生徒の育成を目指します！

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養います。



全県部長
上越市立雄志中学校
校長 中野 博史

▶上越地区

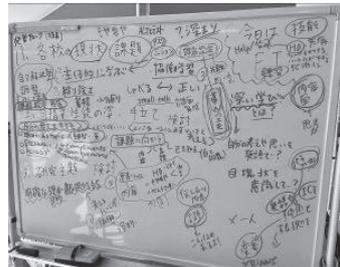
英語科における「深い学び」とは？



糸魚川市中教研
糸魚川市立糸魚川東中学校
森 瑠子

各校の課題から、内容面・言語面での「深い学び」にいたる授業の手立てを検討しました。自分のことを表現できる生徒の姿をTEAM糸魚川で模索していきます。

研究推進委員会の様子



▶新潟地区

英語科の「深い学び」を追究！



新潟市中教研
新潟市立寄居中学校
風間 皓介

教科書を活用し、4技能の有機的なつながりを意識した活動を通して、英語科の「深い学び」にかかる授業研究を進めていきます。

複数の授業者による公開授業をリレー形式で行い、11月の新潟市中教教研研修会での授業公開につなげます。



▶中越地区

深い学びの姿を共有！



加茂市・南蒲原郡中教研
加茂市立須田中学校
渡邊 未緒

テーマは「目的・場面・状況に応じて、伝えたい内容を適切な表現を用いて伝えようとする生徒の育成」です。共通の深い学びの技法を各校で実践していきます。

第1回推進委員会の様子



▶下越地区

「深い学び」にいたる授業実践！！



佐渡市中教研
佐渡市立相川中学校
徳永 友也

外国語における「深い学び」の姿を共有し、市内の外国語担当の先生方でリレー形式の授業実践をしました。中間指導を意識して、深い学びにいたる授業を実践していきます。

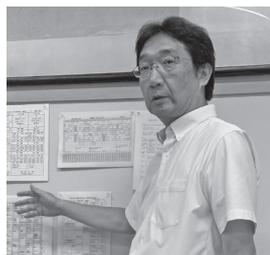
今年度は、両津中、畑野中、佐和田中、南佐渡中でも実践



音楽

表現したい思いや意図に対する感性を高め、学んだ知識や技術をもとに、協働して音楽を練り上げていく。

音楽的視野と表現力の広がりを目指します。



全県部長
新潟市立中之口中学校
校長 藤井 章

保健体育

生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現できる資質・能力の育成を目指し、生徒が「運動が楽しい」と実感できる授業に取り組みます。



全県部長
長岡市立刈谷田中学校
校長 北山 智博

▶上越地区

生徒一人一人が輝く授業づくり！！



柏崎市・刈羽郡中教研
柏崎市立東中学校
安中 美香

生徒の良さや可能性を引き出す「深い学びの技法」によって「個別最適な学び・協働的な学びの一体的な充実」を図り、音楽的資質の向上を目指します。

研究推進委員会の様子



▶中越地区

“客観視”に注目して深い学びを！



長岡市・三島郡中教研
長岡市立西中学校
平川 剛志

生徒の『できる』と『わかる』をつなげる授業づくりを目指します。そのために、自己の姿を“客観視”することに注目して、授業を通して深く考える生徒の姿から研究を進めます。

6月27日 第1回研究推進委員会の様子



▶新潟地区

「見方・考え方」を働かせて！



新潟市中教研
新潟市立木戸中学校
関 裕子

知識を相互に関連付けてより深く理解する場面を設定し、思いや意図をもとに他者と協働しながら音楽表現を追求する姿を目指します。

6月27日に実施した研究推進委員会の様子



▶下越地区

「生徒の良さ」を引き出す授業実践！



阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研
胎内市立黒川中学校
菅原 久代

「する・見る・支える・知る」の視点から、深い学びにつなげ、主体的に学び合える授業実践を目指して研究を進めています。

第1回 研究推進委員会の様子



学校保健

学校は、仲間とともに学び合える場。自分と仲間の考えや思いを交わしながら、学びを深める健康教育を目指します。



全県部長
十日町市立吉田中学校
養護教諭 高橋 妙子

▶上越地区

生徒の『心の回復力』を育てます！



上越市中教研
上越市立頸城中学校
米山 優子

教育活動全般を通して「心の回復力」を育む実践を検討します。よりよい人間関係を確立し、「自分に自信が持てる」「たくましく生活できる」生徒の育成を目指します。

第 1 回研究推進委員会の様子



▶新潟地区

考えを深め、自ら意思決定を！



新潟市中教研
新潟市立新津第一中学校
渡邊 秋子

情報に基づいて健康的な行動を選択できる力を高めるために、自己の考えを深め、自ら意思決定できる力を育てる授業を模索していきます。

新潟市中教研養護部研修会
指導者による講話



編集後記

新潟県中学校教育研究会

理事長 佐藤 靖子

(新潟市立内野中学校 校長)



学ぶ意味を求めて

教師自身が楽しんでいる授業は、生徒も興味関心が高くなる。小学校での学習規律や指導方法の良さを継続できている中学校の学力は高い。生徒が課題を把握し、課題解決までの過程における生徒の思考や態度を重視したコーチング（伴走的支援）を行うと、学びに向かう主体性が高くなる。授業づくりや教材開発に関して、日常的に教師間で気軽に相談しあっている。

これらのことは、R5年12月末「義務教育の在り方ワーキング」にて、全国学力・学習状況調査で思考・判断・表現を問う問題の正答率が高い学校と、学習に対する興味・関心や授業の理解度で肯定的回答の割合が高い学校の傾向を分析した調査結果をまとめたものからの抜粋です。

近年では、脳科学の知見により「脳が『楽しい』と感じ、興味関心を高めたり、対象に対してポジティブな感情をもったりすることが、学習にとってもよい影響を与えられています。楽しいだけでは授業にならないと思いがちですが、「何のために学ぶのか」は学ぶ意味の自覚であり、課題が自分事に引き寄せられていれば、調べてみたい、もっと深く知りたい、できるようになりたいという知的好奇心が自然と高まると考えます。目の前の生徒が将来何になるのか、どのような人生を生きるのかは一人一人異なります。全ての生徒たちが自ら納得できるような学習内容の「将来への役立ち感」を均一にもたせることは困難かもしれません。ですが、今学んでいることが将来の自分を助けたり、他者のためになったり、世の中の役に立つこととなったりすることを教師は常にイメージし、時に具体的な事例を示しながら、授業を構築していくことが大切だと考えます。

生徒が何をどのように学ぶのかについて有効な手立てを検証し、目の前の生徒がいきいきと学び合い、学びへ真摯に向かう姿の変容に感動する場面に私はいくつも出会って参りました。これらのことは各郡市で開催されてきた当研究会での授業提案もかなり貢献してきたと感じます。目指す生徒の学びの姿のために、教師同士が学校間を超え、郡市を超えて互いに対話しながらよりよい授業が構築されていく過程が何よりも大切であり、あらためて授業力が教師の生命線であることを再認識できる研究内容が今までも数多く発表されて参りました。

創設61年目を迎えた当研究会では、昨年度に引き続き、学び合う授業づくり「主体的・対話的で深い学び」の中でも特に、「深い学びにいたる授業」に着目し各所で研究を進めていただいております。

この度、本誌へ文部科学省初等中等教育局主任視学官 田村 学 様より特別寄稿を頂戴致しました。ご多用の中、ご寄稿賜りました田村 学 様に深く感謝申し上げます。

田村 学 様は新潟県のご出身であり、会員の皆様の中でも実際にご講演を聞かれたり、著書を読まれたりしている方も多くことと思います。本紙寄稿文もいつでも読み返して頂き、会員皆様の授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

新潟県中学校教育研究会は、2年間の指定研究推進事業と、その研究の成果を全会員に伝える「授業情報誌Class」の両輪でこれからも全県の授業を支えて参ります。

指定研究に携わられた関係者の皆様と、本誌の編集にあたり、貴重な原稿をいただいた各全県部長・副部長・指定研究会場校の皆様、各研究推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げ、編集後記といたします。